皇太子殿下御降誕記念

皇室御寫眞帖



婦人倶樂部五月號別册


皇室御写真帖


御料
御園白粉
輝やける名、御園白粉！日本最初の純無鉛白粉でありまして、お化粧に恐ろしい鉛毒の大害を立派に防ぎましたので、御料の光榮を荷ひました。御園の名は皆さまにも一番おなじみ深く、ます〳〵御愛用がひろがつて今日に到るまでも優良國産化粧品の模範となつてゐます。ですから外國の白粉などよりもずつと品質が正しくて良いのです。清らかに美しい御整容にこれほど良いお化粧品はございません。
正しき御整容に
御園化粧品・御園石鹸
本舖 伊東胡蝶園

序

大内山、松の緑の濃やかに彌榮えまし、竹の園生、いよゝめでたく繁りますことは、大日本九千萬の赤子の衷心の感激であり、儔なき光榮であります。

殊に最近、皇太子殿下の御降誕は、恐れ多けれど、吾等國民の齊しく待望し奉つた所でありまして、尊き萬世一系の御皇位の、彌遠久に彌遠長に窮りなく榮えまさん祥瑞と仰ぎ奉り、津々浦々に至るまで、春の新潮の如く、大歡喜の聲に響動もされたのであります。

このめでたき御喜びを、愛讀者の皆樣と共に祝ひ奉り、この力強き感激を、皆樣と倶に致すために、私共同人は、齋戒沐浴、謹みて此の『皇室御寫眞帖』を拜輯いたしました。

伏して惟ふに、天皇、皇后兩陛下を初め奉り、大内山、竹の園生の御方々の御尊影を拜して、その御高徳を敬仰し奉らんことは、臣子の敬虔なる至情でございます。然るに時折り新聞紙上や雜誌の口繪等に御尊影を拜することがありましても、勿體ない事ながら、奉安保存に不便の憾がありますので、本書は御尊影を一冊子に拜載して、永く奉拜の出來るやうに謹輯した次第であります。

冀くは愛讀者の皆樣と共に、謹みて本書を鄭重に保存いたし、常に御尊影を奉拜して、御高徳を欽仰し、御聖運の彌ゝ御榮えあらせ給はんことを祈り奉りたいと存じます。

婦人倶樂部編輯局

題字　千葉胤明謹書
表紙　山口蓬春謹畫
口繪　高取稚成謹畫

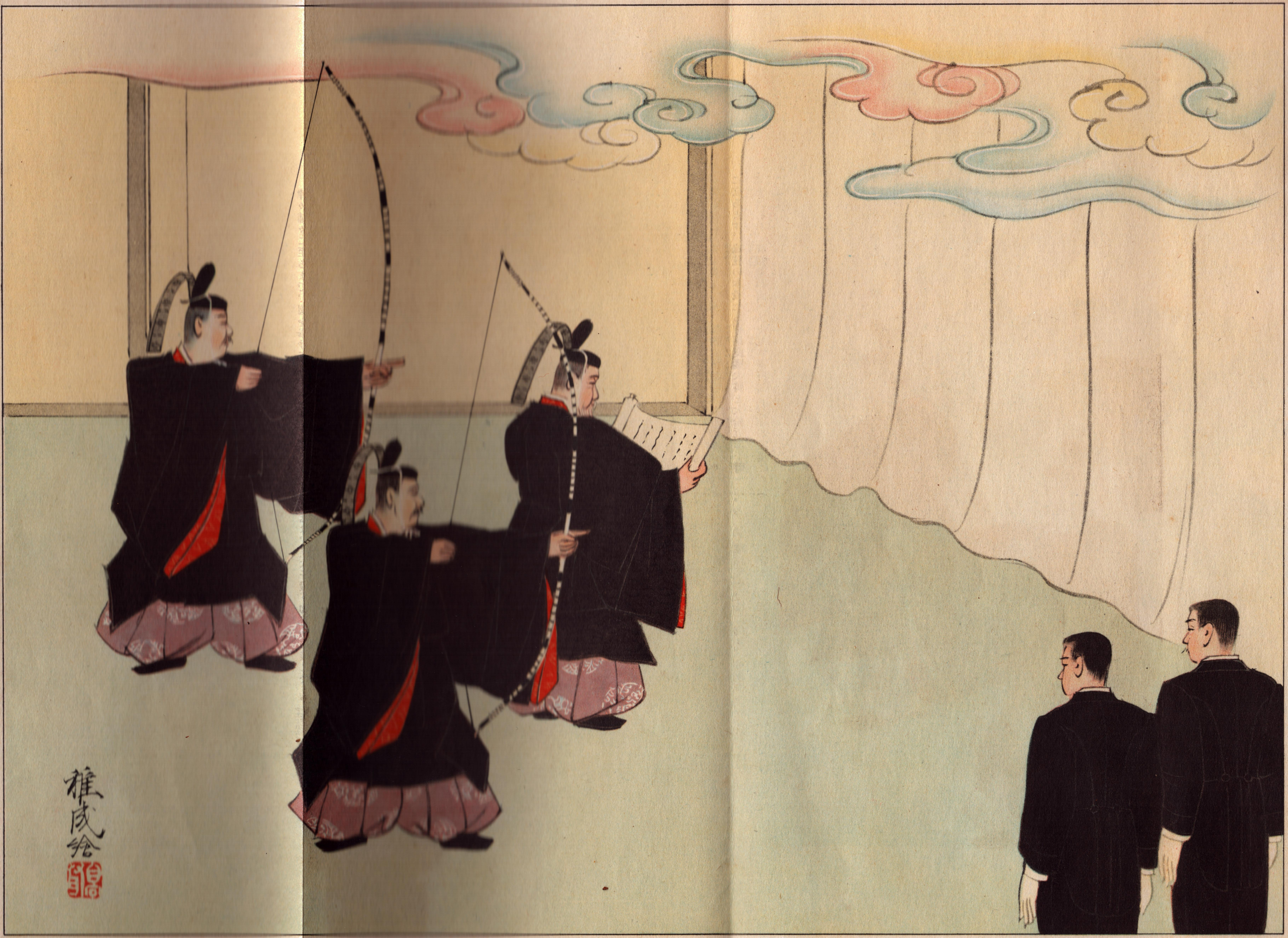
讀書鳴弦の御儀



皇太子殿下御降誕遊ばされて御七日目、昭和八年十二月二十九日、宮中に於いて御浴湯の儀が行はせられました。これは、その時の讀書鳴弦の御模様であります。諸員は何れも衣冠にて奉仕し、御浴殿の帷幕の前に於て白絹の御垂布の内で御產湯を召させられますと き、讀書の本役文學博士市村瓚次郎氏が日本書紀巻五の最も御芽出度き一節を朗々と拜誦し、鳴弦の本役海軍大將有馬良橘、子爵大給近孝の兩氏は弓弦を鳴らし、いとも嚴かな御儀式が行はせられました。この御圖繪の中、燕尾服の方々は參列の宮内官であります。なほこの御儀式の詳細は、裏面市村博士の謹話を御參照下さい。

讀書鳴弦の御儀

皇太子殿下御降誕遊ばされて御七日目、昭和八年十二月二十九日、宮中に於いて御浴湯の儀が行はせられました。これは、その時の讀書鳴弦の御模様であります。諸員は何れも衣冠にて奉仕し、御浴殿の帷幕の前に於て白絹の御垂布の内で御産湯を召させられますとき、讀書の本役文學博士市村瓚次郎氏が日本書紀巻五の最も御芽出度き一節を朗々と拜誦し、鳴弦の本役海軍大將有馬良橘、子爵大給近孝の兩氏は弓弦を鳴らし、いとも嚴かな御儀式が行はせられました。この御圖繪の中、燕尾服の方々は參列の宮内官であります。なほこの御儀式の詳細は、裏面市村博士の謹話を御參照下さい。



御浴湯の儀に就いて

文學博士　市村瓚次郎謹話

昭和八年十二月二十三日、瑞雲棚びき旭日の豐榮昇る頃ほひ、九千萬の赤子が心を一つにしてお待ち申上げました皇太子殿下、御降誕あらせられましたことは、誠に寶祚の御榮え天壤と共に窮りなき至上の御慶福でございます。津々浦々に至るまで、國を舉げてこの御慶事を壽ぎ奉るとき、私は、皇太子殿下御浴湯の儀に於て、辱くも讀書奉仕の大役を拜しましたことは、身に取つて無上の光榮、眞に恐懼に堪へぬ次第であります。

支那では男子の生れました時『桑の弓、蓬の矢を以て、天地四方を射る』といふ故事がありますが、讀書の儀はありません。これは我が國のみに行はれましたやうで、寬弘五年九月、後一條天皇御降誕の砌、御浴湯の儀式に、讀書鳴弦の御儀が行はせられたことが、紫式部日記に見えて居ります。その後永い間行はれましたが、何時頃よりか中絕されてゐましたのを、明治の末年に至つて再び宮中の御儀式として制定せられ、秩父宮殿下御誕生の御時、初めて古式に則つて、この御儀が行はせられたと承つて居ります。

弓矢は昔から武器の第一として重んじ、その弦音のみでも惡鬼の魂を奪ふと信ぜられたものであります。御浴湯の儀に行はせられる鳴弦は、不祥を攘はるゝ意味もありませうが、弓矢は男子の執るべきものとして武を表徴されたものと存じます。そして讀書は文の意味が寓せられたものと拜察します。即ち讀書鳴弦の御儀は、文武二道の御昌運を御祈念するもので、誠に有難い、實に意義深き御式であります。

讀書の御儀には、往時は主として孝經などを讀み上げたやうでありますが、今回は最も御芽出度い日本書紀卷五、崇神天皇の條の『十年秋七月丙戌朔……』の一條を謹選いたしました。その內容は、諸の公卿に詔して、敎化を重んじ、神祇を禮することを告げ給ひ、群卿を遠國に遣はして廣くその御趣旨を知らしめ、また四道將軍に命じて、その敎へを受けざるものあらば之を征伐せよとの詔でございます。即ち文に偏せず武に偏せず、文武二道を以て國家を統治し給ふ御意が拜せられるのであります。

さて、御浴湯の儀は十二月二十九日に行はせられました。今その御模樣を申上げますと、御產湯を召される皇太子殿下の御浴殿に成らせられるに先立ち、私共奉仕の諸員は、衣冠の裝ひでお廊下に整列して奉迎申上げ、やがて殿下が御浴殿に入らせらるるや、讀書の本役を拜した私は、先づ笏と卷物とを持つて次の間の中央に進み、白い帷幕の前に立ちます。鳴弦の本役たる有馬良橘大將と大給近孝子爵とは、少しく離れてその後に續き、弓を捧持しながら竝び立ちました。廣幡皇后宮大夫と岡本事務官とは室の右隅に、控の辻善之助博士、松浦靖子爵、細川立興子爵は、お廊下に起立いたして居ります。

やがて合圖により、私は笏を懷に納めて卷物を開きますと、鳴弦の本役は、低音でいとも莊重に祈禱の辭を述べます。それが終るや否や、私は、前に述べた日本書紀の一節を朗々と拜讀いたします。拜讀が了りますと、鳴弦の本役は左足を進め、引きしぼつた弓弦をひようとばかりに放つて『オー』と呼ばれ、弦鳴は朗々として殿內に響きます。その消えやらぬ響の中やがて私は再び朗々の讀書、次いで又弦鳴、これが內親王の御時には二回、親王の御時には三回でありますが、私共はこれを三回繰返したのであります。

この間に、殿下は芽出度く御浴湯の儀を濟ませられて御退殿遊ばします。私共奉仕の諸員は再びお廊下に整列して奉送申上げました。その間約二十分、極めて嚴肅莊重にして、靄然たる和氣の漂ふのを感じました。

かくして午前九時四十分、芽出度く御浴湯の儀を了へさせられましたが、御式後、諸員一同、天皇陛下に拜謁仰付けられ、特に龍顏の御麗しきを拜し奉つて、感激恐懼いたした次第であります。

に立ちます。鳴弦の本役たる有馬良橘大將と大給近孝子爵とは、少しく離れてその後に續き、弓を捧持しながら竝び立ちました。廣幡皇后宮大夫と岡本事務官とは室の右隅に、控の辻善之助博士、松浦靖子爵、細川立興子爵は、お廊下に起立いたして居ります。

やがて合圖により、私は笏を懐に納めて巻物を開きますと、鳴弦の本役は、低音でいとも莊重に祈禱の辭を述べます。それが終るや否や、私は、前に述べた日本書紀の一節を朗々と拜誦いたします。拜誦が了りますと、鳴弦の本役は左足を進め、引きしぼつた弓弦をひようとばかりに放つて『オー』と呼ぶ。弦鳴は餘韻嫋々として殿内に響きます。その消えやらぬ響の中やがて私は再び朗々の讀書、次いでまた弦鳴。これが内親王の御時には二回、親王の御時には三回でありますが、私共はこれを三回繰返したのであります。

この間に、殿下は芽出度く御浴湯の儀を濟ませられて御退殿遊ばします。私共奉仕の諸員は再びお廊下に整列して奉送申上げました。その間約二十分、極めて嚴肅莊重にして、藹然たる和氣の漂ふのを感じました。

かくして午前九時四十分、芽出度く御浴湯の儀を了へさせられましたが、御式後、諸員一同、天皇陛下に拜謁仰付けられ、特に龍顔の御麗しきを拜し奉つて、感激恐懼いたした次第であります。



二重橋



天皇陛下

御名　裕仁(ヒロヒト)．大正天皇の第一皇男子におはしまし、明治三十四年四月二十九日御降誕。大正十五年十二月二十五日人皇第百二十四代の皇祚を踐ませられ、昭和三年十一月十日御即位の禮を擧げさせられ、同年十一月十四日、十五日大嘗祭を行はせらる。



皇后陛下

御名　良子(ナガコ)．久邇宮故邦彦(クニヨシ)王の第一王女におはしまし、明治三十六年三月六日御誕生。大正十三年一月二十六日御成婚、大正十五年十二月二十五日皇后とならせらる。



皇太后陛下

御名　節子（サダコ）
故從一位大勳位公爵九條道孝の第四女におはしまし、明治十七年六月二十五日御誕生、大正十五年十二月二十五日皇太后とならせらる。



皇太子殿下

御名　明仁（アキヒト）
御稱號　繼宮（ツグノミヤ）
今上天皇の第一皇男子におはしまし、昭和八年十二月二十三日御降誕あらせらる。



照宮成子內親王殿下

今上天皇の第一皇女におはしまし、大正十四年十二月六日御誕生、女子學習院に御在學中。



孝宮和子內親王殿下

今上天皇の第三皇女におはしまし、昭和四年九月三十日御誕生。



順宮厚子内親王殿下

今上天皇の第四皇女におはしまし、昭和六年三月七日御誕生。



澄宮崇仁親王殿下

澄宮崇仁親王殿下は大正天皇の第四皇男子におはしまし、大正四年十二月二日御誕生遊ばされました。昭和七年の春、陸軍士官學校へ御入學あらせられ、本年三月豫科御卒業、士官候補生として習志野騎兵第十五聯隊に御入隊遊ばされました。特に御乗馬に御堪能でいらせられる由承ります。



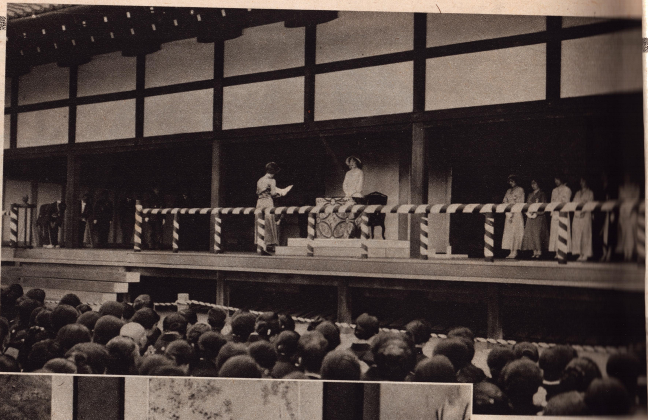
軍國の春を壽ぐ昭和八年陸軍始の觀兵式は、一月八日午前十時代々木原頭において大元帥陛下御親閲の下に、いと嚴かに擧行されました。御寫眞は、御乘馬白雪に召されて御閲兵中の陛下の御英姿でございます。



大元帥陛下には、昭和八年八月、海軍特別大演習を御統裁あらせられました。御寫眞は御召艦比叡の甲板にて軍令部總長伏見宮博恭王殿下の御說明を御聽取遊ばされるところでございます。

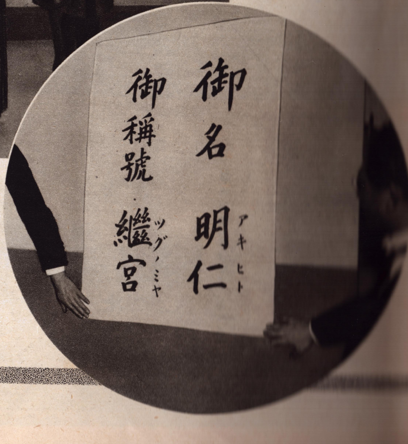


日露戰役奉天の會戰を偲ぶ意義深き第二十九回目の陸軍記念日を迎へた本年三月十日、恒例祝賀會は大元帥陛下の行幸を仰ぎ、九段靖國神社境內の式場に於て、いとも盛大に擧行されました。御寫眞は、祝賀會宴會場臨御の陛下(御中央)、[illegible]





昭和八年[illegible]、[illegible]會は皇后陛下の行啓を仰ぎ、華々しく總會を開きました。御寫眞は、總裁東伏見宮周子殿下の奉答文を聞し召される皇后陛下でございます。



皇太子殿下御降誕の御七日目、昭和八年十二月二十九日、宮中では輝く御慶びの中に、嚴かに御命名の御儀が行はせられました。寫眞は宮內省に於て御名と御稱號とを御發表申上げるところでございます。

昭和八年十月十四日、皇太后陛下には鳩山文相、正木帝國美術院長以下の奉迎裡に帝展に行啓あらせられ、親しく御巡覽遊ばされました。御前が皇太后陛下、御後は秩父宮妃殿下でございます。



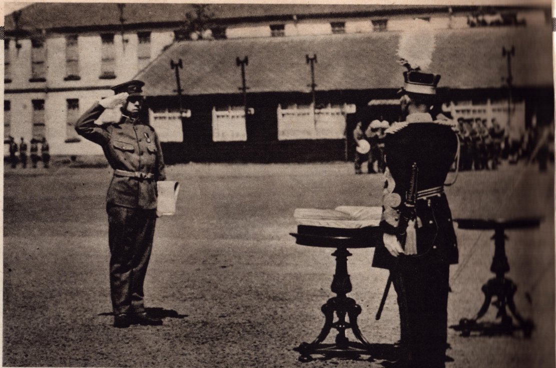
昭和八年十月、照宮、孝宮、順宮の三内親王殿下には、御養育掛、女官等を隨へさせられ、上野動物園に成らせられて、爽やかな秋の一日を御樂しく御過し遊ばされました。御寫眞は、向つて御右より照宮樣、孝宮樣、順宮樣でございます。



海青く潮の香かをる昭和八年五月二十五日、女子學習院に御在學中の照宮樣には、御級友と御睦しく千葉寒川海岸に御成り遊ばされ、御汐干狩に春の一日を御興じあらせられました。〇印が照宮樣でございます。



照宮御殿『呉竹寮』（宮城内）



今春三月十七日、澄宮殿下には御目出度く陸軍士官學校豫科を御卒業遊ばされました。御寫眞は當日の卒業式で、向つて御左の擧手の禮をあそばされてゐるのが殿下でございます。



澄宮殿下には、本年三月十九日士官候補生として、習志野騎兵第十五聯隊に御入隊あらせられました。御寫眞は、御愛馬に召された殿下の御姿でございます。



澄宮御殿（東京市赤坂區）



秩父宮雍仁親王殿下

（陸軍步兵大尉　大勳位）

秩父宮雍仁親王殿下は大正天皇の第二皇男子におはしまし、明治三十五年六月二十五日御誕生遊ばされました。初め淳宮と稱せられましたが、大正十一年六月二十五日御成年と同時に秩父宮の御稱號を賜はりました。大正十四年御渡歐、同十五年英國オックスフォード大學へ御入學遊ばされましたが、昭和二年御歸朝、昭和六年十一月陸軍大學校を優秀の御成績で御卒業あらせられ、現に陸軍步兵大尉、參謀本部附として軍務に御精勵遊ばしてをられます。なほ、日英協會初め日本學術振興會、その他の總裁に仰がれていらせられます。



秩父宮雍仁親王妃勢津子殿下

（勳一等）

妃殿下は、子爵松平保男氏の令姪で、現駐英大使從三位勳一等松平恒雄氏の第一女におはします。明治四十二年九月九日、父君が英國の日本大使館に御勤務の砌、ロンドン郊外で輝かしき呱々の御聲を擧げさせられました。女子學習院にて御修學、松平大使米國駐剳中はワシントン市のフレンヅ・スクールに學ばせられて御歸朝。昭和三年九月二十八日御成婚遊ばされました。御婦德の譽お高くいらせられます。



高松宮宣仁親王殿下

（海軍大尉　大勲位）

高松宮宣仁親王殿下は、大正天皇の第三皇男子におはしまし、明治三十八年一月三日御誕生遊ばされました。初め光宮と稱せられ、大正二年七月六日高松宮の御稱號を賜りました。大正十三年七月拔群の御成績を以て海軍兵學校を御卒業に相成り、昭和五年四月、妃殿下と御揃ひにて御渡英、歐米各國を御歴訪、同六年六月御歸朝遊ばされ、現に海軍大尉『扶桑』の分隊長としてひたすら軍務に御精勵遊ばされてをります。なほ日本美術協會、日土協會その他の總裁に仰がれていらせられます。



高松宮宣仁親王妃喜久子殿下

（勲一等）

妃殿下は、故公爵徳川慶久の第二女にましまし、明治四十四年十二月二十六日御誕生あらせられました。昭和四年春、女子學習院本科を優等の御成績にて御卒業、昭和五年二月四日御婚儀を擧げさせられました。御婦徳のほまれお高くいらせられます。

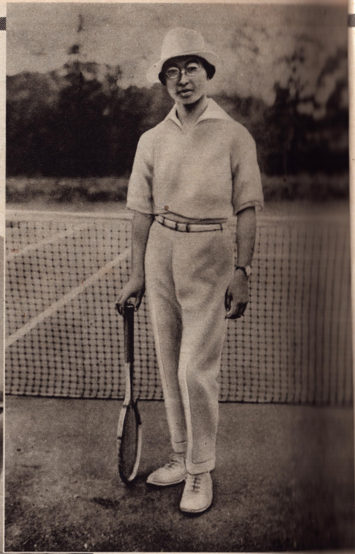


秩父宮同妃兩殿下、高松宮同妃兩殿下には昭和八年十月十五日、お揃ひにて帝展へお成り遊ばされ、正木院長の御案内を受けさせられて、親しく御巡覽遊ばされました。御寫眞は向つて御左より秩父宮殿下、高松宮殿下、高松宮妃殿下、秩父宮妃殿下でいらせられます。

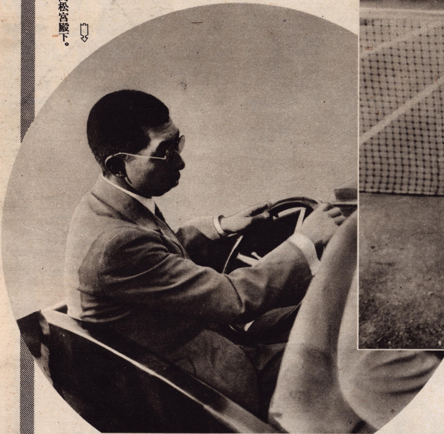
勇壯なる水上競技、第十三回關東學生競漕が、昭和八年九月二十四日隅田川に於て開催されました。當日秩父宮殿下並に同妃殿下にはお揃ひにてランチに召され、台覽遊ばされました。



秩父宮殿下には參謀本部附として御多忙な軍務に御精勵遊ばしてをられますが、その御餘暇にはラケットを御手にコートに立たせられ、テニスをお樂しみ遊ばされます。



モーターボートに興じさせ給ふ高松宮殿下。



熱誠なるスキー・ツアレの歡迎を受けさせられる秩父宮殿下。御先頭に立たせられるのが殿下でございます。





⇧昭和非常時の意義深い大觀艦式は、昨年八月二十五日東京灣横濱沖で盛大に擧行されました。御寫眞は、當日御參列の秩父宮殿下、高松宮殿下、閑院宮殿下でいらせられます。



⇦昭和五年の春、高松宮殿下並に同妃殿下の輝かしい御渡英に先だち、日英協會では兩殿下を東京會館に御招待申上げ、御送別の大夜會を催しました。御寫眞は、當夜御臨場遊ばされた兩殿下でございます。

秩父宮表町御殿（東京市赤坂區）



高松宮御殿（東京市芝區高輪西臺町）





閑院宮載仁親王殿下

（元帥陸軍大將　大勳位功二級）

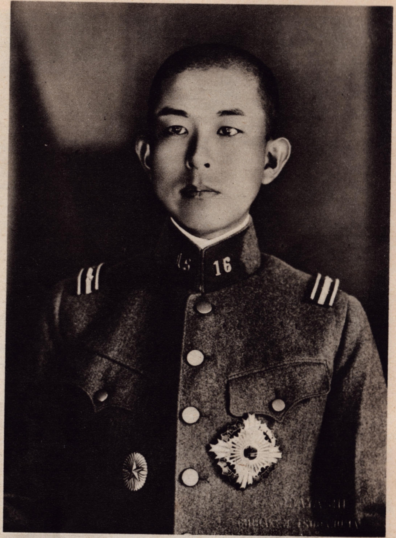
閑院宮載仁親王殿下は故邦家親王の第十六王男子にましまし、慶應元年十一月十日京都の御邸で御誕生遊ばされました。明治五年一月閑院宮を御相續に相成り、日淸日露の兩戰役に御出征遊ばされ、多くの御戰功を擧げさせられました。昭和六年十二月參謀總長に親補せられ、元帥陸軍大將軍事參議官議定官の榮職にあらせられます。軍務御精勵の御傍ら、帝國在鄉軍人會、日本赤十字社、濟生會などの總裁として數多の社會事業に御盡瘁遊ばしていらせられます。



閑院宮載仁親王妃智惠子殿下

（勳一等）

妃殿下は、故正一位大勳位公爵三條實美の第二女にましまし、明治五年六月三十日御誕生遊ばされました。跡見女學校の御出身。明治二十四年十二月十九日御入輿あらせられました。參謀總長として軍務に御繁多の背の宮殿下にお盡しあらせられる御傍ら、日本赤十字社篤志看護婦人會及び大日本婦人教育會の總裁であらせられます。



閑院宮春仁王殿下

（陸軍騎兵大尉　勳一等）

閑院宮春仁王殿下は、載仁親王殿下の第二王男子にましまし、明治三十五年八月三日御誕生遊ばされました。昭和七年十一月陸軍大學校を御卒業に相成り、目下、陸軍騎兵大尉、騎兵第十六聯隊に中隊長として軍務に御精勵遊ばしてをられます。特に馬術の御名手と拝承いたします。



閑院宮春仁王妃直子殿下

（勳二等）

妃殿下は、故正二位勳一等[illegible]明治四十一年十一月七日御誕生[illegible]月十四日御入輿、御貞淑のほまれ[illegible]奉るところでございます。



東伏見宮故依仁親王妃周子殿下

（勳　一　等）

東伏見宮[illegible]月二十九日の御誕生[illegible]す。なほ御養嗣東伏見[illegible]には、今春京都帝國大學[illegible]した。妃殿下のお喜びもいかばかりかと拝察申上げます。



伏見宮博恭王殿下

（元帥海軍大將　大勳位功四級）

伏見宮博恭王殿下は、故貞愛親王の第一王男子として、明治八年十月十六日御誕生遊ばされました。初め華頂宮を嗣がせられましたが、其後、御復歸遊ばされ、當宮第二十二代を繼がせられました。現に元帥海軍大將大勳位功四級、議定官、軍事參議官、軍令部總長として軍務に御精勵あらせられるほか、水交社、大日本水產會をはじめ公共諸團體の總裁として日夜御休養の御暇もあらせられぬやに洩れ承ります。



伏見宮博恭王妃經子殿下

（勳一等）

妃殿下は故從一位勳一等德川慶喜の第九女にましまし、明治十五年九月二十三日御誕生。明治三十年一月九日御入輿遊ばされました。御淑德高くおはしまし、現に陸海軍將校婦人會及び福田會の總裁として御仁慈を垂れさせていらせられます。



伏見宮博義王殿下
（海軍中佐　大勲位）

伏見宮博義王殿下は博恭王殿下の第一王男子にましまし、明治三十年十二月八日御誕生遊ばされました。大正三年東京府立第四中學校より海軍兵學校に入らせられ、更に海軍水雷學校に進ませられました。現在は海軍中佐、海軍大學校選科學生として御勉學中であらせられます。



伏見宮博義王妃朝子殿下
（勲一等）

妃殿下は、明治三十五年六月二十日、故正二位勲一等公爵一條實輝の第三女として御誕生遊ばされました。學習院女學部の御出身、大正八年十二月二十三日御入輿遊ばされ、博明王殿下、光子女王殿下、令子女王殿下、章子女王殿下を擧げさせられ、御慈愛深き御母宮として、ひたすら御四方の御教育に御心をお用ひ遊ばしてをられます。



伏見宮博明王殿下
伏見宮光子女王殿下

博明王殿下（御寫眞向つて御左）は、博義王殿下の第一王男子におはしまし昭和七年一月二十六日御誕生遊ばされました。光子女王殿下（御寫眞向つて御右）は、博義王殿下の第一王女にましまし昭和四年七月二十八日御誕生遊ばされました。御姉弟の宮樣はことのほか御睦じく、御母宮殿下の深き御いつくしみのもとに、いと御健やかに御成長遊ばされていらせられます。

伏見宮令子女王殿下

令子女王殿下は、博義王殿下の第二王女にましまし、昭和八年二月十四日御誕生遊ばされました。當年御二歳、いと御健やかに御生育であらせられます。

伏見宮章子女王殿下 章子女王殿下は、博義王殿下の第三王女にましまし、昭和九年二月十一日、芽出度き紀元節の御當日、御誕生遊ばされました。御寫眞はこゝに拜戴申上げることが出來ませんでした。

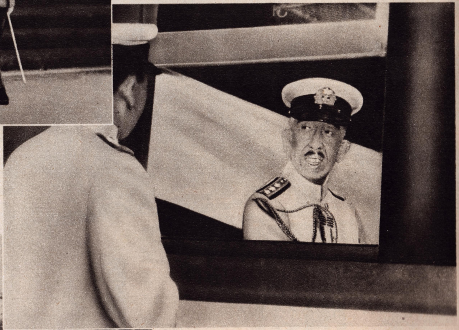




伏見宮博英王殿下

伏見宮博英王殿下は、博恭王殿下の第四王男子にましまし、大正元年十月四日御誕生遊ばされました。目下海軍兵學校御在學、ひたすら御勉學中でいらせられます。



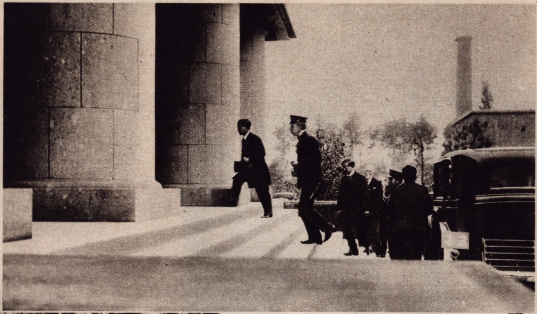


軍令部總長伏見宮博恭王殿下には、昭和七年九月十一日、聯合艦隊戰技演習特命檢閲使として、隨員を從へさせられ、東京驛發御西下遊ばされました。尊き御身を以て、親しく軍務をみそなはせらるることは、まことに畏き極みでございます。

參謀總長閑院宮載仁親王殿下には、昭和七年十月三日、靖國神社に御參拜遊ばされ、本殿に御參進、親しく玉串を捧げさせられ、皇軍の英靈を御拜あらせられました。



閑院宮春仁王殿下には、昭和八年五月、同妃直子殿下とお揃ひにて樺太地方を御見學遊ばされました。この御寫眞は同月二十九日、日露國境境界標の傍に立たせられた御記念の御寫眞でございます。



⇨ 軍令部總長伏見宮博恭王殿下には、昭和八年四月二十一日、航空研究所に成らせられ、中外に誇る同研究所の設備を御熱心に御巡覽遊ばされました。

⇩ 參謀總長閑院宮載仁親王殿下に獻上の御銅像が、昭和八年十二月、見事に完成いたしました。獻進者は何れも殿下の御德を敬慕する參謀本部の方方で、殿下へ對し奉る部下の至誠のほどが偲ばれます。御寫眞はその御銅像と、光榮の謹作者渡邊長男氏でございます。



⇧ 軍令部總長伏見宮博恭王殿下には、昭和八年六月、横濱入港の米國アジア艦隊、テーラー提督、艦長バガレー大佐以下乘組將校を霞關離宮に御招待遊ばされ、和やかな午餐會をお開きになつて、親しくその勞をお犒ひ遊ばされました。





山階宮故菊麿王妃 常子殿下（勳一等）

妃殿下は、故公爵島津忠義の第三女にましまし、明治七年二月七日御誕生遊ばされました。明治三十五年御入輿遊ばされ、背の宮薨去の御後は御慈愛深き御母宮として、王子様方御敬慕の御中心にあらせられます。



山階宮武彦王殿下（海軍少佐 勳一等）

山階宮武彦王殿下は、故菊麿王の第一王男子にましまし、明治三十一年二月十三日御誕生遊ばされました。勳一等豫備海軍少佐であらせられます。



賀陽宮故邦憲王妃好子殿下（勲一等）

大妃殿下は、故侯爵醍醐忠順の第一女にましまし、慶應元年十二月七日御誕生遊ばされました。御慈愛深き御祖母宮として若宮様方を御相手にお静かな御日常をお過し遊ばされていらせられます。



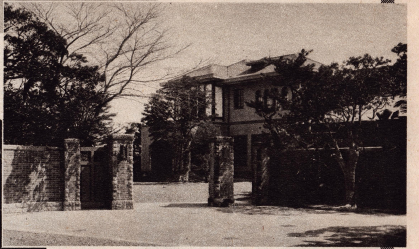
賀陽宮御殿（東京市麹町區三番町）



閑院宮御殿（東京市麹町區永田町二丁目）

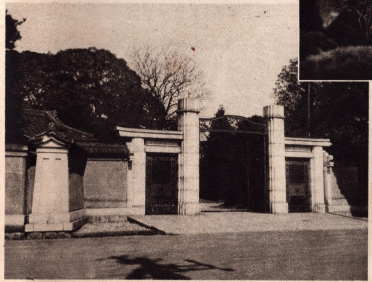


東伏見宮御庭園



東伏見宮御殿（東京市澁谷區常磐松町）

山階宮御殿（東京市麹町區富士見町二丁目）





伏見宮御殿（東京市麹町區紀尾井町）



賀陽宮恒憲王殿下

（陸軍騎兵少佐　大勳位）

賀陽宮恒憲王妃敏子殿下

（勳　一　等）

賀陽宮恒憲王殿下は故邦憲王の第一王男子にましまし、明治三十三年一月二十七日御誕生遊ばされました。現に陸軍大學校敎官、陸軍騎兵少佐にあらせられ本年三月、妃殿下と御揃ひにて御外遊の途につかせられました。妃殿下は故公爵九條道實の第五女にましまし、明治三十六年五月十六日御誕生あらせられ、大正十年五月三日御入輿遊ばされました。敷島の道に御造詣お深くあらせられます。



賀陽宮邦壽王殿下
賀陽宮治憲王殿下
賀陽宮章憲王殿下
賀陽宮文憲王殿下
賀陽宮美智子女王殿下

邦壽王殿下は恒憲王殿下の第一王男子にましまし、學習院初等科六年に御在學遊ばされます。第二王男子治憲王殿下には初等科二年に、第一王女美智子女王殿下は、女子學習院中期一年に御在學あそばされます。章憲王殿下は第三王男子、文憲王殿下は第四王男子にあらせられ、若宮樣方は御仲極めて御睦しく、御外遊中の御兩親宮殿下の御留守をお守り遊ばされてをります。御寫眞御後側は邦壽王殿下、御前側向つて御右より文憲王殿下、治憲王殿下、章憲王殿下、美智子女王殿下でございます。



久邇宮故邦彦王妃俔子殿下

（勲一等）

大妃殿下は故公爵島津忠義の第七女にましまし、明治十二年十月十九日の御誕生、明治三十二年御入輿遊ばされました。畏くも皇后陛下の御母宮におはしまし、御淑德高き御方として國民のひとしく鑽仰申上げてゐるところでございます。皇太子殿下御降誕については御祖母宮にあたらせられる大妃殿下の御歡び殊の外と拜察申上げます。



昭和八年十二月二十九日、皇太子殿下御命名の御儀の當日、歡喜に熱狂した東京市民は提灯行列を催し、皇后陛下の御里方久邇宮邸前に賑々しく參集し、奉祝申上げました。御寫眞は、御玄關先にて行列に御答禮の久邇宮大妃殿下でございます。（⇧）



（⇦）皇后陛下が皇太子妃に御内定後、久邇宮御邸内に御學問所を設けられ、御花御殿と申上げました。御成婚前までこゝに御起居遊ばされましたが、その後、女子教育御奬勵の御思召を以て東京府に御下賜になり、これを麻布の府立第三高等女學校内に奉遷して『仰光寮』と申上げてをります。昭和八年十月、久邇宮大妃殿下の台臨を仰ぎ、盛大なる落成式が行はれました。御寫眞は、式を了へさせられて御退出遊ばされる大妃殿下でございます。



久邇宮御殿

（東京市澁谷區宮代町）



久邇宮朝融王妃知子女王殿下

（勳　二　等）

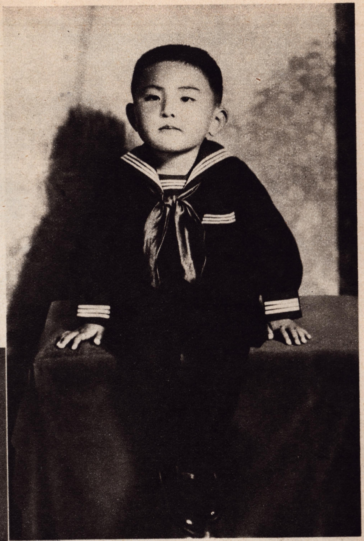
妃殿下は伏見宮博恭王殿下の第三王女にまします、明治四十年五月十八日御誕生あらせられ、大正十四年一月二十六日御入輿遊ばされました。御趣味御豐に、御教育にも御熱心で、若宮樣方の御薫育に日夜御心をそゝがせられていらせられます。



久邇宮朝融王殿下

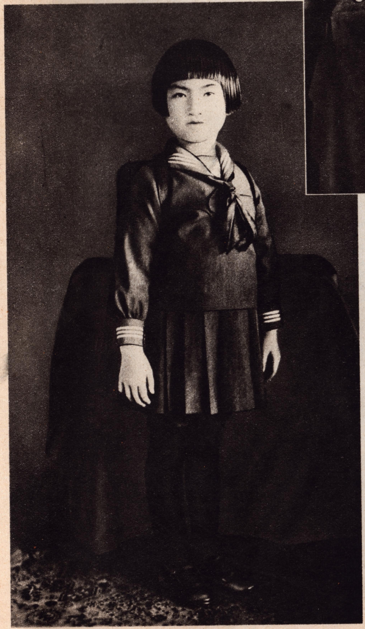
（海軍少佐　大勳位）

久邇宮朝融王殿下は故邦彦王の第一王男子にまします、明治三十四年二月二日御誕生あらせられました。大正十年七月海軍兵學校を御卒業遊ばされ、現に『木曾』の砲術長として、砲術にかけては横須賀鎮守府に於ても屈指の御名手と承ります。



久邇宮邦昭王殿下

邦昭王殿下は、朝融王殿下の第一王男子にましまし、昭和四年三月二十五日御誕生遊ばされました。非常に御聰明であらせられ、まだ幼稚園へもお上りにならせられぬ御頃から、姉宮様方の御勉强ぶりをお見習ひ遊ばされて、假名や繪をお上手にお書き遊ばされた由承ります。



久邇宮正子女王殿下

正子女王殿下は、朝融王殿下の第一王女にましまし、大正十五年十二月八日御誕生あらせられました。今春、女子學習院前期二年に御進級遊ばされ、專ら御學問をお勵み遊ばしてをられます。



久邇宮朝子女王殿下

朝子女王殿下は、朝融王殿下の第二王女にましまし、昭和二年十月二十三日御誕生あらせられました。今春、女子學習院前期一年に御入學遊ばされました。



久邇宮通子女王殿下

通子女王殿下は、朝融王殿下の第三王女にましまし、昭和八年九月四日御誕生遊ばされました。御母宮殿下の深き御慈愛のもとに極めて御健やかに御發育あらせられる由承ります。



久邇宮多嘉王殿下
（神宮祭主　大勳位）

久邇宮多嘉王妃靜子殿下
（勳一等）

久邇宮多嘉王殿下は、故朝彦親王の第五王男子にましまし、明治八年八月十七日御誕生遊ばされました。伊勢大神宮の祭主にましまし、京都に住まはせられますが、御祭典のたび伊勢に御參向遊ばされます。また向陽會の總裁にあらせられます。

妃殿下は、故子爵水無瀨忠輔の第一女にましまし、明治十七年九月二十五日御誕生遊ばされました。明治四十年三月九日御入輿あらせられ、今は若宮殿下お三方の御母宮として御手づから御勉學の御指導まで遊ばしていらせられます。



久邇宮家彥王殿下
久邇宮徳彥王殿下
久邇宮恭仁子女王殿下

家彥王殿下は、多嘉王殿下の第二王男子にましまし、大正九年三月十七日御誕生遊ばされました。只今は京都府立第一中學校に御在學中。

徳彥王殿下は、多嘉王殿下の第三王男子にましまし、大正十一年十一月十九日御誕生あらせられました。只今は、京都市立春日尋常高等小學校に御在學中。

恭仁子女王殿下は、多嘉王殿下の第三王女にましまし大正六年五月十八日御誕生遊ばされました。只今は、京都府立第一高等女學校に御在學中でいらせられます。

（御寫眞、左頁向つて御右より家彥王殿下、徳彥王殿下、恭仁子女王殿下でございます。）



梨本宮守正王殿下

（元帥陸軍大將　大勳位功四級）

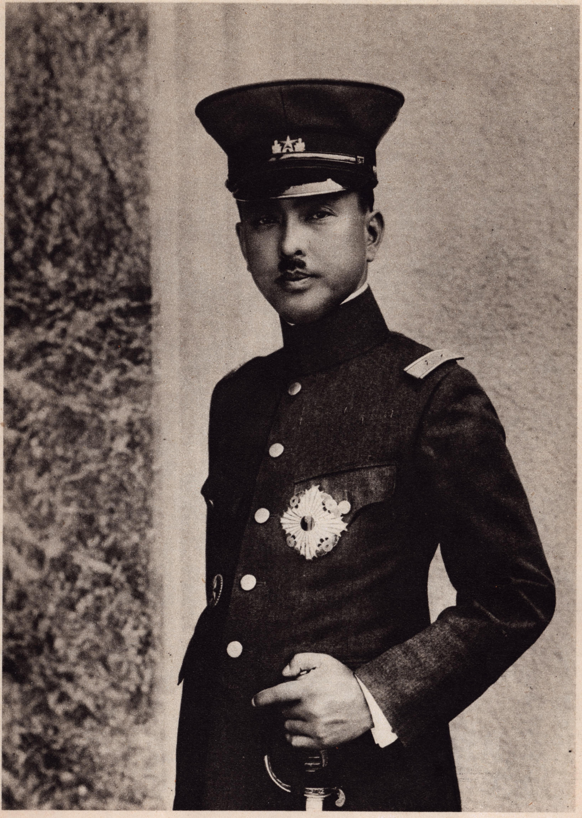
梨本宮守正王殿下は、故朝彦親王の第四王男子にましまし、明治七年三月九日御誕生遊ばされました。佛蘭西へ再度御留學、軍事學を御研究遊ばされました。昭和七年八月元帥府に列せられ、現に元帥陸軍大將軍事參議官の要職を帯びさせられるほか、大日本農會、大日本武德會、帝國飛行協會等の總裁でいらせられます。



梨本宮守正王妃伊都子殿下

（勳一等）

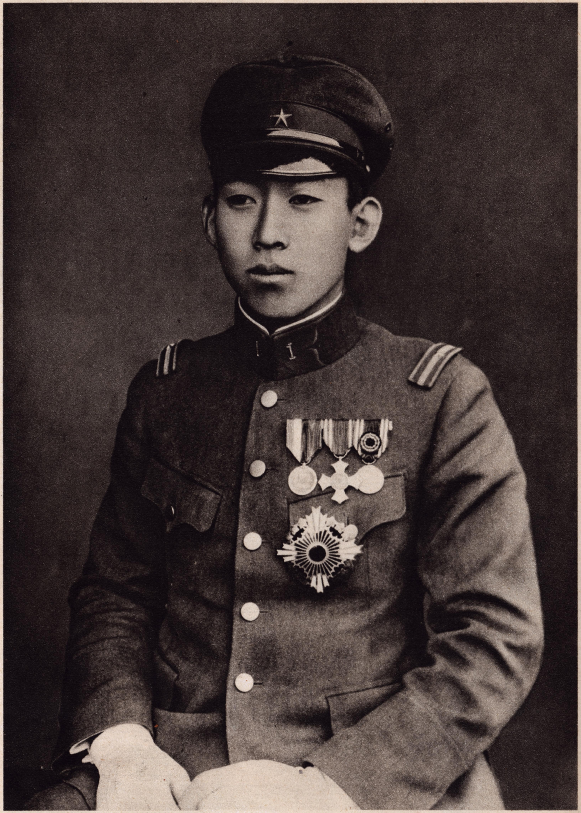
妃殿下は、故侯爵鍋島直大の第二女にましまし、明治十五年二月二日御誕生遊ばされました。明治三十三年十一月二十八日御入輿あらせられ、御繁多な宮にお盡し遊ばされる御傍ら、社會事業にも御心を注がせられ、愛國婦人會その他の事業にお力をお盡し遊ばしていらせられます。



朝香宮鳩彦王殿下

（陸軍中將　大勳位）

朝香宮鳩彦王殿下は、故朝彦親王の第八王男子にましまし、明治二十年十月二日御誕生あらせられました。明治三十九年朝香宮の御稱號を賜はり、陸軍中央幼年學校、陸軍士官學校、及び陸軍大學校を御卒業遊ばされ、御滯歐四年にして御歸朝、現に陸軍中將近衞師團長の要職にあらせられます。



朝香宮孚彦王殿下

（陸軍步兵少尉　勳一等）

孚彦王殿下は、鳩彦王殿下の第一王男子にましまし、大正元年十月八日御誕生遊ばされました。陸軍士官學校を御卒業、現に陸軍步兵少尉、步兵第一聯隊附として軍務に御精勵遊ばしてをられます。



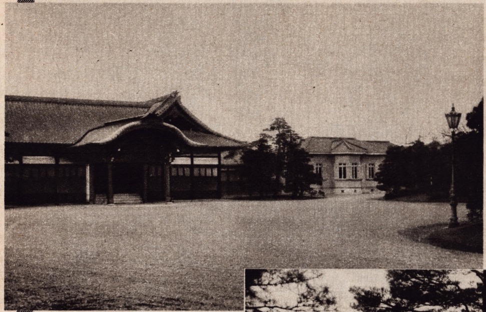
朝香宮正彦王殿下

正彦王殿下は、鳩彦王殿下の第二王男子にましまし、大正三年一月五日御誕生あらせられました。學習院中等科を御卒業遊ばされ、現在は海軍兵學校に御在學、ひたすら御勉學遊ばしてをられます。



朝香宮湛子女王殿下

湛子女王殿下は、鳩彦王殿下の第二王女にましまし、大正八年八月二日御誕生遊ばされました。今春、女子學習院高等科に御入學、ひたすら御勉學遊ばしてをられます。故母宮殿下にお似させ給ひ、非常に御聰明であらせられます。



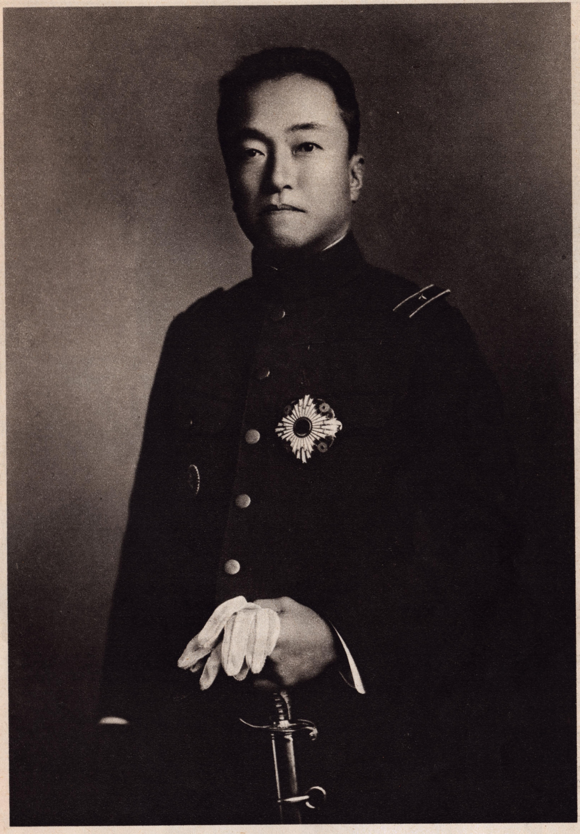
梨本宮御殿（東京市澁谷區美竹町）



朝香宮御殿（東京市芝區白金臺町二丁目）



東久邇宮御殿（東京市麻布區市兵衛町一丁目）



東久邇宮稔彦王殿下
（陸軍中將　大勳位）

東久邇宮稔彦王殿下は、故朝彦親王の第九王男子にましまし、明治二十年十二月三日御誕生あらせられました。明治三十九年十一月東久邇宮の御稱號を賜はりました。大正三年十一月陸軍大學校を御卒業、大正九年四月佛蘭西に御留學、昭和二年一月御歸朝遊ばされました。現に陸軍中將第二師團長として仙臺に在らせられ、親しく軍務をお執り遊ばしてをられます。なほ、軍務の御傍ら、總裁として日本新聞協會、泰東書道院等にお盡し遊ばしていらせられます。



東久邇宮稔彦王妃聰子内親王殿下
（勳一等）

東久邇宮盛厚王殿下
東久邇宮彰常王殿下
東久邇宮俊彦王殿下

妃殿下は明治天皇の第九皇女におはしまし、明治二十九年五月十一日御誕生あらせられ泰宮の御稱號を賜はりました。大正四年五月十八日御入輿遊ばされ、御慈愛深き御母宮として、若宮殿下御三方の御教育にひたすら御心を注がせ給うていらせられます。

盛厚王殿下は、稔彦王殿下の第一王男子にましまし、大正五年五月六日御誕生遊ばされました。學習院中等科を御卒業、只今は陸軍士官學校豫科に御在學中でいらせられます。

彰常王殿下は、稔彦王殿下の第三王男子にましまし、大正九年五月十三日御誕生遊ばされました。只今は、學習院中等科に御在學中でいらせられます。

俊彦王殿下は、稔彦王殿下の第四王男子にましまし、昭和四年三月二十四日御誕生遊ばされました。御慈しみ深き御母宮殿下の御膝下で、御元氣にすく〳〵とお育ち遊ばしていらせられます。

（御寫眞向つて御右より盛厚王殿下、彰常王殿下、俊彦王殿下、妃聰子内親王殿下でございます。）

北白川宮故能久親王妃富子殿下

（勳一等）

妃殿下は故公爵島津久光の御養女、故侯爵伊達宗徳の第二女にましまし、文久二年十月一日御誕生あらせられ、明治十九年七月十日御入輿遊ばされました。背の宮殿下御薨去の後は、若宮様方の御孝養をお受け遊ばされ、御健しき日を送られていらせられます。





北白川宮故成久王妃房子内親王殿下

（勳一等）

妃殿下は明治天皇の第七皇女におはしまし、明治二十三年一月二十八日御誕生遊ばされ、周宮の御稱號を賜はりました。明治四十二年四月二十九日御入輿遊ばされました。御姉妹の宮、東久邇宮稔彦王妃聰子内親王殿下、竹田宮故恒久王妃昌子内親王殿下との御仲もいと御睦しく、幾多の御逸話を洩れ承つてをります。



北白川宮永久王殿下

（陸軍砲兵中尉　勳一等）

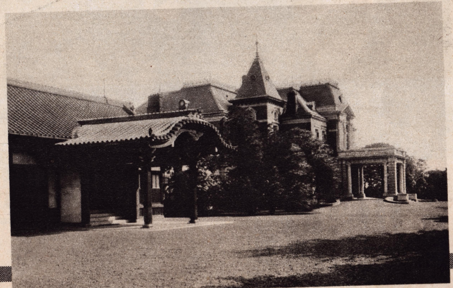
北白川宮永久王殿下は故成久王の第一王男子にましまし、明治四十三年二月十九日御誕生遊ばされました。陸軍幼年學校を經て、昭和六年七月陸軍士官學校を御卒業、現に陸軍砲兵中尉、近衞野砲兵聯隊附でいらせられます。



北白川宮佐和子女王殿下
北白川宮多惠子女王殿下

佐和子女王殿下は、故成久王の第二王女にましまし、大正二年十月二十一日御誕生遊ばされました。女子學習院本科を御卒業遊ばされ、御淑徳高き御母宮殿下の御指導のもとに、何かと御修養をお積み遊ばしていらせられます。（御寫眞向つて御左）

多惠子女王殿下は、故成久王の第三王女にましまし、大正九年四月十五日御誕生あらせられました。只今は、女子學習院に御在學遊ばされ、ひたすら學びの道におゐそしみ遊ばしていらせられます。（御寫眞向つて御右）



北白川宮御殿（東京市芝區高輪南町）



竹田宮故恒久王妃昌子内親王殿下
（勳一等）

竹田宮恒徳王殿下
（陸軍騎兵中尉 勳一等）

竹田宮禮子女王殿下
（勳二等）
（本年三月二十六日佐野伯爵家御降嫁）

妃殿下は、明治天皇の第六皇女におはしまし、明治二十一年九月三十日御誕生。常宮の御稱號を賜はりました。明治四十一年四月三十日御入輿遊ばされ、背の宮薨去の後は、東京慈惠會、婦人共立育兒會の總裁として專ら社會事業に御力を盡されていらせられます。

恒徳王殿下は、故恒久王の第一王男子にましまし、明治四十二年三月四日御誕生あらせられました。昭和五年陸軍士官學校を御優等の御成績にて御卒業あそばされました。現に、陸軍騎兵中尉、騎兵第一聯隊附として軍事の御研究に御精勵遊ばされていらせられます。

禮子女王殿下は、故恒久王の第一王女にましまし、大正二年七月四日御誕生あそばされました。女子學習院本科を御卒業になり、今春三月二十六日、伯爵佐野常羽氏嗣子佐野常光氏に御降嫁あらせられました。

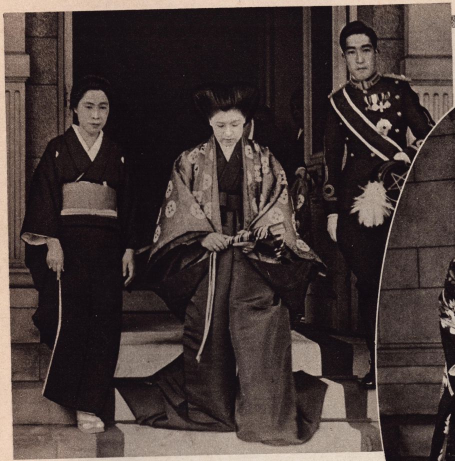
王公家



李王垠殿下

（陸軍歩兵中佐　大勳位）

李王垠殿下は、故李太王の第七王男子にましまし、明治三十年十月二十日御誕生あらせられました。陸軍士官學校を經て大正十二年十一月二十九日陸軍大學校を御卒業遊ばされ、昭和七年八月八日陸軍歩兵中佐に御陞進、現に陸軍教育總監部附として軍事に御力を注がれていらせられます。





⇨

竹田宮禮子女王殿下には、伯爵佐野常羽氏嗣子常光氏に御降嫁のため、今年三月十三日御芽出度く告期の儀を擧げさせられました。女王殿下には御式後、霞關離宮に宮内官及び御緣故者を招かせられ、姫宮として御別れの午餐會をお催しになりました。御寫眞は、當日御母宮殿下と御一緒に宮邸をお出ましのお姿でございます。

⇧

竹田宮禮子女王殿下には今春三月二十六日、かねて御婚約中の佐野常光氏に御降嫁遊ばされました。御寫眞は﨟たけきおすべらかしにゆかしき袿袴を召されて、お名殘多き御殿を御出ましの禮子女王殿下と御見送りの御母宮殿下並に御兄宮恒德王殿下でございます。

竹田宮御殿（東京市芝區高輪南町）





竹田宮御殿（御内園より）



李王垠妃
方子女王殿下
（勲一等）

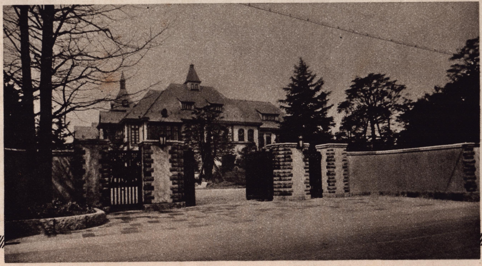
妃殿下は、梨本宮守正王殿下の第一王女にましまし、明治三十四年十一月四日御誕生あらせられ、大正九年四月二十八日御入輿遊ばされました。特に繪畫に御趣味お深くいらせられ、帝展、院展、二科等の展覧會には必ず台臨遊ばされ、また御手づから御繪筆を執らせらるゝ由洩れ承ります。
故李王妃殿下尹氏　殿下は、明治二十七年九月十九日の御誕生でございます。御寫眞は拜載の運びにいたりませんでした。

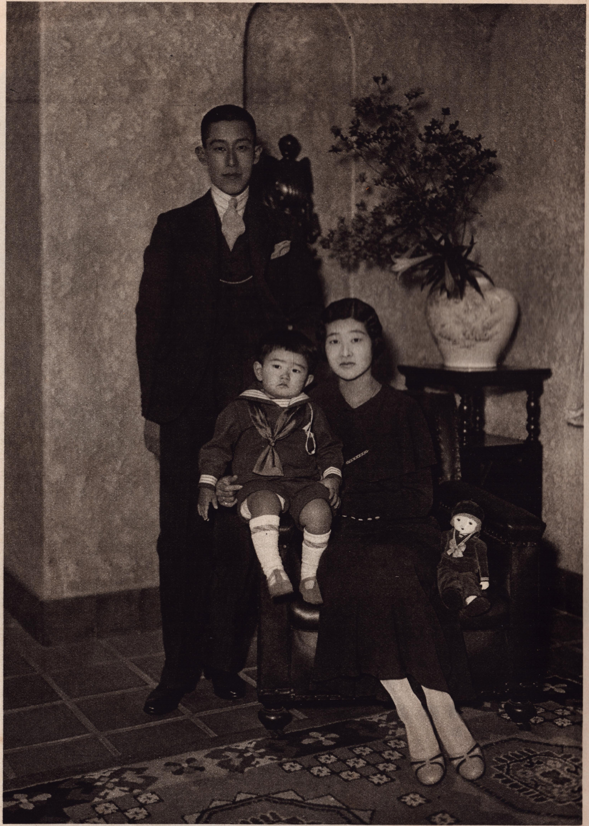
王世子李玖殿下



玖殿下は、李王垠殿下の第二王男子にましまし、昭和六年十二月二十九日御誕生遊ばされました。御兩親殿下の御寵愛の中に、いと御健やかに御成長遊ばしていらせられます。

李王家東京邸（東京市麹町區紀尾井町）





李鍵公殿下
（陸軍騎兵中尉　勲一等）
李鍵公妃誠子殿下
（勲二等）
李沖公子

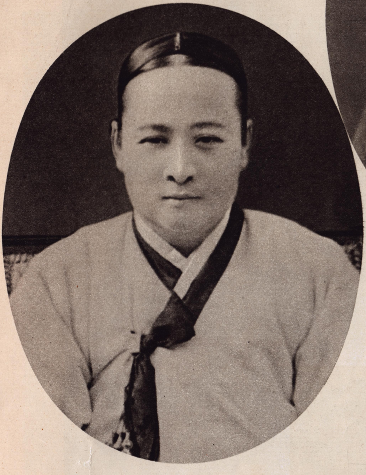
李鍵公殿下は、李堈殿下の第一公男子にましまし、明治四十二年十月二十八日御誕生。昭和五年六月御父君殿下御隱居のため公家の正系を繼がせられました。同五年夏、陸軍士官學校を御卒業、現に陸軍騎兵中尉として近衛騎兵聯隊に御勤務遊ばされていらせられます。
妃殿下は、正五位松平胖氏の第一女として明治四十四年十月六日御誕生遊ばされました。實踐女學校の御出身で、昭和六年六月伯爵廣橋眞光氏家族として御入籍、同年秋御入輿あらせられました。
李沖公子は李鍵公殿下の第一公男子にましまし、昭和七年八月十四日御誕生あらせられました。

李堈殿下は、故李太王の第二王男子にましまし、明治十年三月三十日御誕生遊ばされました。御仁德高く、現に陸軍中將の禮遇を受けさせられてをります。妃殿下は、故男爵金思濬の第一女として明治十一年十二月二十二日御誕生。御婦德の聞え御高くいらせられます。



李堈殿下

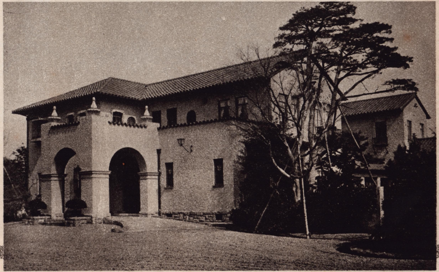
（大勲位）



李堈妃殿下

（勲二等）

李鍵公邸（東京市澁谷區常磐松町）



李鍝公殿下

（陸軍砲兵少尉　勲一等）

李鍝公殿下は、李堈殿下の第二公男子にましまし、大正元年十一月十五日御誕生。同六年五月特旨により故李埈公の御繼嗣とならせられました。昭和八年七月十一日、陸軍士官學校を御卒業、現に陸軍砲兵少尉として野砲兵第一聯隊に御勤務遊ばされます。

故李熹公妃殿下
故李埈公妃殿下
御二方の御寫眞は拜載の運びにいたりませんでした。





李辰琬姫

李辰琬姫は、故李埈公の第一公女にましまし、大正五年五月十八日御誕生遊ばされました。御趣味もお廣く、御學才にも秀でていらせられます。

御降下の方々と御家庭



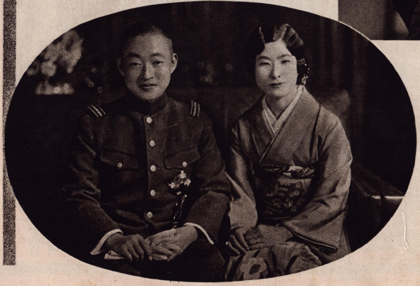
小松輝久侯爵の御家庭



上野正雄伯爵御夫妻



山階芳麿侯爵御夫妻



久邇邦久侯爵御夫妻

（右上）　上野伯は海軍中佐で、北白川宮故能久親王の第五王男子、北白川宮永久王殿下、竹田宮恒徳王殿下の叔父君に當らせられ、明治三十年臣籍に御降下遊ばされました。只今では夫人惠以子様との間に、長女順子様（十八歳）長男正泰様（十七歳）次男龍雄様（十四歳）三男忠雄様（十二歳）次女悦子様（九歳）四男久雄様（八歳）を擧げられ、和氣藹々のお賑やかさでございます。

（左上）　小松侯は北白川宮故能久親王の第四王男子で、明治四十三年七月二十日臣籍に御降下遊ばされました。貴族院議員、海軍大佐正三位勳一等、現に海軍軍令部に出仕されてをります。夫人薰子様は、島津忠承公の姉君で、御夫婦の間にお三人の方々を擧げられてをります。お寫眞は、向つて右より夫人薰子様、次男豐久様（十四歳）長女舒子様（十二歳）長男彰久様（十六歳）後が御當主輝久侯でございます。

（上）　山階侯は、山階宮故菊麿王の第二王男子で、大正九年七月二十四日臣籍に御降下遊ばされました。貴族院議員、陸軍砲兵中尉從三位勳一等、鳥類の研究家として聞えていらつしやいます。夫人壽賀子様は酒井忠克伯の令妹で、背の君の御研究を助けられ、澁谷のお邸は賑やかな小鳥の聲に包まれてをります。

（左）　皇后陛下の御兄君であらせられる久邇侯は、久邇宮故邦彦王の第二王男子で、大正十二年十月二十五日臣籍に御降下遊ばされ、貴族院議員、陸軍歩兵大尉正四位勳一等、陸軍戸山學校附でいらせられます。夫人董子様は、子爵松浦靖氏の次女、女子學習院御出身の才媛でいらつしやいます。

竹田宮恒徳王殿下と御婚約中の三條光子姫



竹田宮恒徳王殿下には、かねて三條光子姫と御婚約中のところ、本年三月十六日勅許あり、御結婚の儀は、青葉薫る五月の頃、御芽出度く擧げさせらるゝやう承ります。

光榮の光子姫は、公爵三條公輝氏第二女、大正四年十一月六日のお生れでございます。女子學習院本科を御優秀の御成績で御卒業、才色兼備のきこえお高くいらせられます。

御降嫁の方々と御家庭



竹内惟斌子爵御一家

（左）惟斌子爵は陸軍騎兵大尉。母君絢子様は故竹内惟忠子爵夫人で久邇宮故邦彦王の御姉君でいらつしやいます。夫人喜代子様は、大村純英伯の長女でございます。お寫眞は後に立たれるのが惟斌子爵、向つて右より絢子母堂、喜代子夫人、次女純子様（二歳）次男惟義様（六歳）長女英子様（四歳）長男惟貞様（八歳）でございます。



故東園基愛子爵夫人榮子様

（上）榮子様は故基愛子爵夫人で、久邇宮故邦彦王の御姉君に當られ、故竹内惟忠子爵夫人絢子様のお姉君でいらつしやいます。只今は久邇宮御邸内で手藝などに親しまれ、靜かな日を送つてをられます。





山内豐景侯爵御夫妻

（上）豐景侯は、維新の功臣で知られた故山内容堂の御令孫に當り、麝香間祗候、貴族院議員、陸軍歩兵少佐でございます。夫人禎子様は、伏見宮故貞愛親王の第一王女、女流薙刀の大家で、先年宮内省の武道大會に出場され、天晴れ女性のために氣を吐かれた方でございます。





筑波藤麿侯爵御一家

（右上）華頂侯は、伏見宮博恭王殿下の第三王男子で、大正十五年十二月七日臣籍に御降下遊ばされ、同月十三日閑院宮載仁親王殿下の第五王女華子様と御婚儀をお擧げになりました。侯爵は海軍大尉正四位勲一等、只今では二人の可愛い若様がいらつしやいます。お寫眞は、父君とお並びになつていらつしやるのが長男博道様（五歳）母君に抱かれていらつしやるのが、次男博孝様（三歳）でございます。

（左上）國史の研究で夙に令名の高い筑波侯は、山階宮故菊麿王の第三王男子で、從四位勲一等、昭和三年七月二十日臣籍に御降下遊ばされました。夫人喜代子様は、子爵毛利高範氏の第五女で、一男一女を擧げられました。（左中）長男常治様（五歳）長女登喜枝様（三歳）でございます。



東伏見邦英伯爵

（左下）皇后陛下の御弟君にあたらせられる東伏見伯は、久邇宮故邦彦王の第三王男子で、從四位勲一等昭和六年四月四日臣籍に御降下遊ばされました。今春、京大文學部史學科を首席を以て御卒業遊ばされ、卒業論文『奈良平安過渡期の時代精神』は主任教授西田博士を驚嘆せしめたさうでございます。



華頂博信侯爵御一家



葛城茂麿伯爵御夫妻

（右下）葛城伯は山階宮故菊麿王の第五王男子で昭和四年十二月二十四日臣籍に御降下遊ばされました。陸軍歩兵中尉從四位勲一等として陸軍科學研究所に勤務されてをります。夫人敏子様は、細川護立侯の長女で、昨年十一月華燭の典をお擧げになりました。

有馬頼寧伯爵御一家

（右）　頼寧伯は貴族院に議席をもたれ、元農林政務次官で、代議士に當選されたこともございます。夫人貞子様は北白川宮故能久親王の第二王女、明治三十六年二月六日御降嫁遊ばされ、甘露寺伯夫人、保科伯夫人、二荒伯夫人と御姉妹でいらつしやいます。長女靜子様は齋藤首相の嗣子齊氏の夫人となつてをられます。お寫眞は前列向つて右より次女澄子様、夫人、四女正子様、後列同じく右より次男頼春様、伯爵、三男頼義様でございます。





甘露寺受長伯爵御一家

（左）　受長伯は侍從の重職を帶び、同時に式部官を兼ね、馬術に長じてをられます。夫人滿子様は、北白川宮故能久親王の第一王女、有馬伯夫人の姉君で、明治三十七年十一月十四日御降嫁になりました。お寫眞は、向つて右より、長男忠長様、受長伯、立子母堂、滿子夫人、次男親房様でございます。

壬生基義伯爵御一家

（右）　基義伯は陸軍少將で、馬術の名手でございます。夫人篶子様は、久邇宮故朝彦親王の第八王女で、明治三十九年十月二十八日御降嫁遊ばされました。お寫眞は、向つて右より四女種子様、基義伯、篶子夫人、長男基泰様でございます。





保科正昭子爵御一家と令姪

（左）　正昭子は貴族院議員として專らお力を注がれてをります。夫人武子様は北白川宮故能久親王の第三王女、甘露寺伯爵夫人の妹君で、明治四十四年四月十七日御降嫁遊ばされました。お寫眞は後列向つて右より令息正虎様、正昭子爵、前列中央が武子夫人でございます。尚、夫人の向つて左は令姪、齋藤首相令嗣齊氏夫人靜子様（有馬伯令嬢）、右は同じく令姪、土方日銀總裁令嗣久雄氏夫人壽子様（甘露寺伯令嬢）でございます。



黒田長禮氏御一家

（右）　長禮氏は黒田長成侯の令嗣で、式部官、主獵官を兼ね、理學博士の稱號を有せられ、鳥獸研究の權威者でございます。夫人茂子様は、閑院宮載仁親王殿下の第二王女、大正三年一月二十一日御降嫁遊ばされました。長女政子様は前田利爲侯令嗣利建氏の許に近くお輿入れになるとのことでございます。お寫眞は、向つて右より次女光子様（十四歳）茂子夫人、三女靜子様（八歳）長禮氏、長女政子様（二十歳）長男長久様（十九歳）でございます。



二荒芳徳伯爵御一家

（左）　芳徳伯は貴族院議員で、少年團日本聯盟理事長として社會教育に專ら力を注がれてをります。夫人擴子様は、北白川宮故能久親王の第五王女で、大正四年七月二十日御降嫁遊ばされました。お寫眞は、伯爵御夫妻と長男芳忠様（五歳）長女富士子様（十九歳）三女明子様（十二歳）四女治子様（十歳）でございます。なほこの他に本年お生れの次男芳彦様がいらつしやいます。



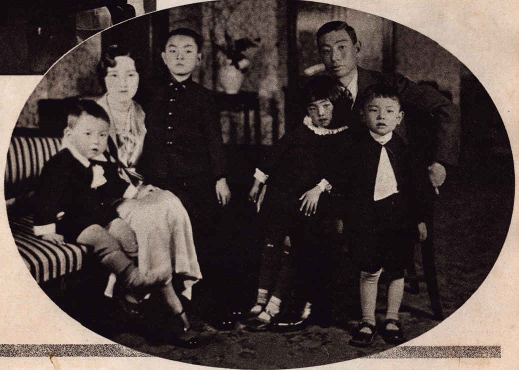
安藤信昭子爵の御家庭

（右）信昭子は貴族院に議席を有し、横濱生命保險會社取締役で、實業方面に活動されてをります。夫人恭子様は、閑院宮載仁親王殿下の第一王女で、大正四年九月三日御降嫁遊ばされました。お子様方が多くいらせられ大變お賑やかな御家庭でございます。お寫眞は、前列向つて右より祥子様（十一歳）治子様（八歳）康子様（九歳）後列は母君と朋子様（十七歳）でございます。

（下）長武氏は淺野長勳侯の令孫、長之氏の御長男で、史學の御造詣深く、帝國學士院の囑託をされてをります。夫人安子様は、山階宮故菊麿王の第一王女で、大正九年十一月九日御降嫁遊ばされ、現在三人のお子様の母君でいらつしやいます。お寫眞は後が長武氏、前列向つて右より次男茂松様（八歳）安子夫人、長女頼子様（十二歳）長男長愛様（十歳）でございます。



淺野長武氏御一家



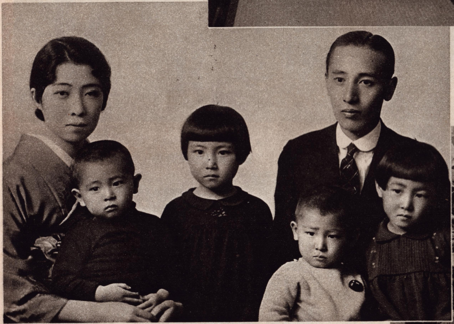
大谷光暢伯爵御一家

（右）京都東本願寺の法主光暢伯は、句佛上人の御長男、眞宗大谷派管長で、わが宗教界の重鎭でいらつしやいます。夫人智子様は、久邇宮故邦彦王の第三王女、畏くも皇后陛下の御妹君にあたられ、大正十三年五月三日御降嫁遊ばされました。お寫眞は、御兩親のお膝に睦しくお集りになつた長男光紹様（十歳）長女美都子様（七歳）次男暢順様（六歳）三男暢顯様（五歳）の方々でございます。

三條西公正氏の御家庭

（右）公正氏は實義伯の令嗣で、圖書寮御用掛をされ、乘馬がお上手でいらつしやいます。夫人信子様は、久邇宮故邦彦王の第二王女で、畏くも皇后陛下の御妹君にあたられます。大正十三年十二月九日御降嫁遊ばされ、現在は五人のお子様達のお優しい母君としてお暮しになつてをられます。お寫眞は、右より次男實榮様（四歳）長男實謙様（六歳）三女洋子様（三歳）長女淑子様（九歳）次女嘵子様（八歳）とお母様でございます。





清棲幸保伯爵の御一家



廣橋眞光伯爵夫人

（右）眞光伯は、東京帝大出身の秀才で、現在は千葉縣廳に勤務され、社會課長、官房主事、祕書課長を兼任されてをります。夫人規子様は、梨本宮守正王殿下の第二王女で、大正十五年十二月二日御降嫁遊ばされました。お三人のお子様をお擧げになり、明るい御家庭を營んでおいでになります。お寫眞は、お氣輕に蔬菜園に出られ、土に親しまれる規子夫人でございます。

（上）幸保伯は、生物學の研究家として令名がございます。夫人敦子様は、伏見宮博恭王殿下の第二王女で、大正十五年十月二十七日御降嫁遊ばされました。四人のお子様達の良きお母様であらせられると共に、背の君の御研究をも助けられてをります。お寫眞は、後が伯爵、前列向つて右より、次女慶子様（七歳）長男家隆様（六歳）長女貞子様（八歳）母君に抱かれていらつしやるのが次男家治様（四歳）でございます。

皇太子殿下の御身位について

宮內省圖書頭　渡部信謹述

昭和八年十二月二十三日、豐榮昇る朝日と共に、繼宮明仁親王殿下御降誕あらせられましたことは、吾等九千萬國民の、齊しく感激歡喜に堪へざる所であります。此のお目出度い機會において、皇太子の御身位といふことを、御制度の上から聊か謹話致したいと存じます。

恭しく按じまするに、殿下は、畏くも、今上天皇の皇長男子に渡らせられますから、直ちに皇太子の御身位を有し給ふのであります。

古へは、皇子は勿論、皇子にあらせられぬ皇族男子が、皇太子に立たれました事例も少くありません。又時には皇族女子にして儲位（御世嗣の御身分、即ち皇太子）に登らせられたこともあります。併し何方にしましても、之を皇太子と申し上げることは、立太子の御儀を行はせられることによつて初めて定るのでありまして、それ以前に於ては皇長子たる親王と雖も、皇太子の御身位を有せられなかつたのを常としたのであります。

かやうに、皇太子に關する往時の制度は、必ずしも一樣でありませんでしたが、明治天皇の欽定になりました『皇室典範』によつて、『大日本國皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ繼承ス』また『皇位ハ皇長子ニ傳フ』更に『儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス』と規定せられましたので、尊き萬世一系の皇位を最先順位に於て御繼承あそばす皇嗣の御位置は、往時のやうに立太子の御儀によつて初めて定るものでなく、又皇太子と申す御名稱は、必ず親王たる皇子に限ることを明らかにせられたのであります。

而してこの御制度に於ける皇儲の御降誕は、憲法及び皇室典範の制定以來、今回が初めての御事で、即ち畏くも明仁親王殿下は、御生れながらの皇太子殿下におはしますのであります。實に空前の御慶事と申さねばなりません。いづれ、大寶令以來の沿革に則つて官制が設けられ、東宮職を置き、東宮大夫、東宮侍從長以下の職員を任命せられ、又別に東宮武官長及び東宮武官をも附屬せしめられること丶拜察致します。

なほ皇太子の御班位は、皇后宮、太皇太后宮、皇太后宮の次に在らせられ、一般皇族の上に位せられます。御紋章は、聖上と同じく、十六葉八重表菊形を用ひられます。皇太子の行啓には、皇太子旗を揭げさせられ、朝廷の御儀式には特別の公式鹵簿を用ひられ、その他の場合には略式鹵簿を用ひられます。

皇太子の御身位は、往時のやうに立太子の御儀によつて定るものでないことは前に申し述べましたが、併し皇族中でも特に尊榮の御身位に在らせられますので、臣民の瞻望を滿たしむる御趣旨によつて、追つて適當な時期に於て、佳き日を選ばれ、立儲令の規定に隨ひ莊重なる立太子の御儀が行はせられること丶存じます。この時、聖上陛下から皇太子殿下に、歷朝御相傳の壺切の御劍をお授けになりませうが、これは宇多天皇（第五十九代）が皇嗣醍醐天皇の立太子の時にお傳へになつて以來の御嘉例と傳へられてをります。

なほ皇太子は、滿七歲に達せられた後、大勳位に敍し、菊花大綬章を賜はり、滿十歲にならせられた後、陸海軍の武官に任ぜさせられます。御成年は特に滿十八歲と定められ、賢所大前に於て、聖上出御の上で、御成年式が行はれることになつて居ります。



立花種勝氏御夫妻

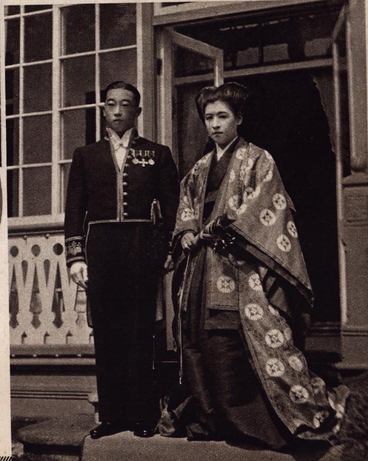
（右上）種勝氏は、子爵立花種忠氏の嗣子で、三井鑛山株式會社に勤務されてをります。夫人美年子樣は、北白川宮故成久王の第一王女で、永久王殿下の御妹君にあたられ、昭和八年一月十七日御降嫁遊ばされました。お寫眞は、御婚禮當日の晴れのお姿でございます。

（下）武志伯は學習院の御出身で、洋畫をよくされます。夫人德惠樣は、李王垠殿下の妹君に當らせられ、昭和六年五月八日御降嫁遊ばされました。只今では一人の可愛いお姬樣がをられます。お寫眞は、お庭に立たれた伯爵御夫妻と、正惠樣（三歲）でいらつしやいます。





宗武志伯爵御一家



佐野常光氏御夫妻

（右）常光氏は、海軍少將伯爵佐野常羽氏の養嗣子でいらつしやいます。夫人禮子樣は、竹田宮故恒久王の第一王女、恒德王殿下の御妹君にあたられ、今春三月二十六日御降嫁遊ばされました。お寫眞は芽出度く華燭の典を擧げさせられた晴れのお姿でございます。

子爵嗣子町尻量基氏夫人由紀子樣
（賀陽宮家より御降嫁）
侯爵嗣子鍋島直泰氏夫人紀久子樣
（朝香宮家より御降嫁）
御寫眞は御都合の爲拜載の運びにいたりませんでした。

（皇室及び王公家御略系譜）

大正天皇
皇太后陛下 御名 節子（故公爵九條道孝第四女）

- 天皇陛下 御名 裕仁（大正天皇第一皇男子）
- 皇后陛下 御名 良子（久邇宮故邦彦王第一王女）
  - 第一皇男子 皇太子 繼宮 明仁親王殿下
  - 第一皇女 照宮 成子内親王殿下
  - 第三皇女 孝宮 和子内親王殿下
  - 第四皇女 順宮 厚子内親王殿下
- 第二皇男子 （秩父宮）雍仁親王殿下
  - 妃 勢津子殿下（子爵松平保男氏姪）
- 第三皇男子 （高松宮）宣仁親王殿下
  - 妃 喜久子殿下（故公爵徳川慶久第二女）
- 第四皇男子 澄宮 崇仁親王殿下

（伏見宮）
故貞愛親王
- 第一王男子 博恭王殿下
  - 妃 經子殿下（故徳川慶喜第九女）
  - 第一王男子 博義王殿下
    - 妃 朝子殿下（故公爵一條實輝第三女）
    - 第一王男子 博明王殿下
    - 第一王女 光子女王殿下
    - 第二王女 令子女王殿下
    - 第三王女 章子女王殿下
  - 第三王男子 侯爵華頂博信（臣籍降下）
  - 第四王男子 博英王殿下
  - 第二王女 敦子（伯爵清棲幸保氏ニ降嫁）
  - 第三王女 知子女王（久邇宮朝融王殿下妃）
- 第一王女 禎子（侯爵山内豊景氏ニ降嫁）

（閑院宮）
故邦家親王 ― 第十六王男子 載仁親王殿下
- 妃 智惠子殿下（故公爵三條實美第二女）
- 第二王男子 春仁王殿下
  - 妃 直子殿下（故公爵一條實輝第四女）
- 第一王女 恭子（子爵安藤信昭氏ニ降嫁）
- 第二王女 茂子（侯爵嗣子黒田長禮氏ニ降嫁）
- 第五王女 華子（侯爵華頂博信氏ニ降嫁）

（東伏見宮）
故依仁親王妃周子殿下（故公爵岩倉具定第一女）

（山階宮）
故菊麿王
- 妃 常子殿下（故公爵島津忠義第三女）
- 第一王男子 武彦王殿下
- 第二王男子 侯爵山階芳麿（臣籍降下）
- 第三王男子 侯爵筑波藤麿（臣籍降下）
- 第五王男子 伯爵葛城茂麿（臣籍降下）
- 第一王女 安子（侯爵嗣子淺野長武氏ニ降嫁）

故朝彦親王

（久邇宮）
第三王男子 故邦彦王
- 妃 俔子殿下（故公爵島津忠義第七女）
- 第一王男子 朝融王殿下
  - 妃 知子女王殿下（伏見宮博恭王殿下第三王女）
  - 第一王男子 邦昭王殿下
  - 第一王女 正子女王殿下
  - 第二王女 朝子女王殿下
  - 第三王女 通子女王殿下
- 第二王男子 侯爵久邇邦久（臣籍降下）
- 第三王男子 伯爵東伏見邦英（臣籍降下）
- 第一王女 良子女王（皇后陛下）
- 第二王女 信子（伯爵嗣子三條西公正氏ニ降嫁）
- 第三王女 智子（伯爵大谷光暢氏ニ降嫁）

第五王男子 多嘉王殿下
- 妃 靜子殿下（故子爵水無瀨忠輔第一女）
- 第二王男子 家彦王殿下
- 第三王男子 德彦王殿下
- 第三王女 恭仁子女王殿下

（梨本宮）
第四王男子 守正王殿下
- 妃 伊都子殿下（故侯爵鍋島直大第二女）
- 第一王女 方子女王（李王垠殿下妃）
- 第二王女 規子（伯爵廣橋眞光氏ニ降嫁）

（朝香宮）
第八王男子 鳩彦王殿下
- 第一王男子 孚彦王殿下
- 第二王男子 正彦王殿下
- 第一王女 紀久子（侯爵嗣子鍋島直泰氏ニ降嫁）
- 第二王女 湛子女王殿下

（東久邇宮）
第九王男子 稔彦王殿下
- 妃 聰子内親王殿下（明治天皇第九皇女）
- 第一王男子 盛厚王殿下
- 第三王男子 彰常王殿下
- 第四王男子 俊彦王殿下

（賀陽宮）
故邦憲王
- 妃 好子殿下（故侯爵醍醐忠順第一女）
- 第一王男子 恒憲王殿下
  - 妃 敏子殿下（故公爵九條道實第五女）
  - 第一王男子 邦壽王殿下
  - 第二王男子 治憲王殿下
  - 第三王男子 章憲王殿下
  - 第四王男子 文憲王殿下
  - 第一王女 美智子女王殿下
- 第二王女 由紀子（子爵嗣子町尻量基氏ニ降嫁）

第二王女 榮子（故子爵東園基愛ニ降嫁）
第五王女 絢子（故子爵竹内惟忠ニ降嫁）
第八王女 鷹子（伯爵壬生基義氏ニ降嫁）

（北白川宮）
故能久親王
- 妃 富子殿下（故侯爵伊達宗德第二女）
- 第二王男子 故成久王
  - 妃 房子内親王殿下（明治天皇第七皇女）
  - 第一王男子 永久王殿下
  - 第一王女 美年子（子爵嗣子立花種勝氏ニ降嫁）
  - 第二王女 佐和子女王殿下
  - 第三王女 多惠子女王殿下
- 第四王男子 侯爵小松輝久（臣籍降下）
- 第五王男子 伯爵上野正雄（臣籍降下）
- 第一王女 滿子（伯爵甘露寺受長氏ニ降嫁）
- 第二王女 貞子（伯爵有馬頼寧氏ニ降嫁）
- 第三王女 武子（子爵保科正昭氏ニ降嫁）
- 第五王女 擴子（伯爵二荒芳德氏ニ降嫁）

（竹田宮）
第一王男子 故恒久王
- 妃 昌子内親王殿下（明治天皇第六皇女）
- 第一王男子 恒德王殿下
- 第一王女 禮子（伯爵嗣子佐野常光氏ニ降嫁）

（王公家）
故李太王
- 第七王男子 李王垠殿下
  - 妃 方子女王殿下（梨本宮守正王殿下第一王女）
  - 第二王男子 王世子 李玖殿下
- 故李王妃殿下（侯爵尹澤榮氏女）
- 第二王男子 李堈殿下（御隠居）
  - 李堈妃殿下（故男爵金思濬女）
  - 第一公男子 李鍵公殿下
    - 妃 誠子殿下（伯爵廣橋眞光氏家族、松平胖氏第一女）
    - 第一公男子 李沖
- 第四王女 李德惠（伯爵宗武志氏ニ降嫁）

故李熹公妃殿下 ― 故李埈公妃殿下
- 李鍝公殿下（李堈殿下第二公男子）
- 李辰琬

（昭和九年四月五日現在）

御日常と御逸話

天皇陛下の御事

天皇陛下には、毎朝御食事の前に御日拜所に入らせられ、伊勢神宮、桃山御陵、多摩御陵等を御遙拜遊ばされる由に承ります。尚、四大節と祝祭日には齋戒沐浴あらせられて、宮中三殿を御親拜遊ばされ、殊に新嘗祭の時には、夕の御儀、曉の御儀の御二つを御親祭あらせられるため、畏くも前後四時間に亙り、賢所の御座に在らせられて、國土豐穰、萬民安康を御祈念遊ばさるる由に洩れ承ります。その御敬虔なる大御心のほど、承るだに恐れ多い極みでございます。

昨秋福井縣下に於て陸軍特別大演習が擧行されました時は、何分にも天候に惠まれぬ裏日本のことて、丁度その期間中毎日雨が降り續いてをりました。然るに、誠に畏きことには、陛下が行在所をお出ましになり、御野立所に臨御遊ばされると、やがて雨は小止みとなり、忽ちの間に薄日さへ射し始めて、平野に活躍する諸兵の姿が明らかに浮び上るのでありました。やがて、陛下が御統監を終らせられ、還御遊ばされると、暫し降りやんでゐた雨は再び激しい勢で降始めました。しかも御統監三日の間、一日の例外もなく、この通りであつたと申すことでございます。一天萬乘の大君の御稜威の然らしむるところで、實に當然の御事とは申せ、その御瑞相を目のあたり仰ぎ見た民草は、この大君の聖代に生れ合した身の有難さに、たゞたゞ感泣するのみであつたと申します。

畏くも陛下には、下萬民のために日夜聖慮を碎かせ給ひ、御政務の間に入らせられた儘、御深更に及ばせ給ふことも珍らしからぬ由に洩れ承ります。地震、大火、旱魃等の事が天聽に達しますと、早速國務大臣その他に拜謁を仰付けられ、詳しくその狀況を御下問になる由でございます。

昨秋の福井縣下に於ける大演習地は、前記の通り連日の雨の爲に泥濘脛を沒する有樣で、諸兵は泥まみれとなつて、活動を續けてをりましたが、陛下の御英姿を拜し奉らんと近縣から擧つて同地に集つて參りました民草はその泥濘深い水田の中に油紙や莚などを敷き、その上に盛裝して端坐してをりました。衣服のよごれることなどを意とせぬ熱誠な奉拜者の有樣を御覽あらせられた陛下には、恐れ多くも、御感深く、お喜び遊ばされた由承りますが、同時に民草の身を御軫念遊ばされて、忝けなくも、おいたはりの有難き御諚を賜はり、供奉の人々は、あまりにも御仁慈深き聖慮に感泣して、恐懼措くところを知らなかつたと承ります。

陛下が下萬民に範を垂れ給ひ、皇太后陛下に御孝養を盡し給ふ事は申上げるも畏き極みでございます。

陛下が生物學に深い御造詣のあらせられる事は、屢々拜聞致すところであります。夏季、御避暑遊ばす葉山御用邸には、御さゝやかな水族館をお建て遊ばし、珍らしい魚類等を御蒐集になつてをられますが、換水用のポンプに故障を來した場合や、東京に還幸遊ばされる場合には、魚類の斃死を憐れに思召す聖慮から、この水族館の魚類は

總て海中へお放ち遊ばされるさうでございます。心なき魚類にまで御憐みをかけさせ給ふ御仁慈のほどは、たゞたゞ感激の外ございません。

皇后陛下の御事

皇后陛下には御幼時より敬神の御心いと深くおはしまし、御入内前まだ久邇宮家にあらせられました頃には、毎朝先づ第一に、御殿の奧深き後苑の淨域に奉安されてある皇大神宮に御參拜あらせられた由に洩れ承ります。

故杉浦重剛翁が、御入内前、御進講仰付つて居りました頃、詩牌の詩を選んで捧呈申上げたことがありました。ところが、杉浦翁の歿後、陛下御入内遊ばされてより一兩年を經て、當時久邇宮宮務監督國分三亥氏に、その詩牌を作つて差出せよとの御下命がありましたので、國分氏は恐懼して早速調査致しましたところ、その詩は漸く七十首に止り、且つ、その詩は維新志士の悲憤慷慨の心を讀んだものが多く、その意氣は感ずべくその至誠は認められますが、中には格調低く、御朗詠遊ばさるるにはいかゞかと、いさゝか懸念の點もありましたので、國分氏は、その中の甚だしきものを削り、更になるべく百首に增補申上げたき旨を言上いたしましたところ、陛下におかせられては、杉浦の選定したるものに手を加へることはお望み遊ばされぬとの思召でありましたので亡き師を御敬愛遊ばされる御心の有難さに感泣しつゝ、國分氏は自己の輕率を恐懼し奉り、直に舊のままの詩牌をお作り申上げたと承ります。

大正十一年夏、當時女王殿下であらせられた陛下には、鹽原御用邸に御避暑中、瀧めぐりを遊ばした折、嶮岨な道を隨從申上げてゐた老齢の御用掛故後閑菊野女史の身を氣遣はせ給ひ、度々お立停りになつてお待ち遊ばされ、又飛石をお渡りの時などは親しく御手を貸し給ふなど、なにくれとなくおいたはりあらせ給ふ御仁情の篤きに、隨從みな感激せぬ者はなかつたと承ります。

これも女王殿下であらせられた時の御事。嘗て中野電信隊より一番の傳書鳩を獻上申上げましたところ、その飼育に殊の外御丹精遊ばされ、やがて次々と殖えて遂に夥しい數に達した鳩は、日毎御肩や御手などにお戯れするまでに、よくなついてゐたと申す事でございます。

その頃の御事でございませう、寒風吹き荒び、粉雪さへ降り始めた或る夜、後閑御用掛が、ふと目をさまし、御隣室にあたる御寢所を拜しますとお姿がお見えになりませんので、いかゞ遊ばしたかとお案じ申上げてゐますと、丁度その時お廊下を急ぎ足にいらせられるお姿を拜したのでございます。

『如何遊ばされました。』

と恐る／＼お伺ひ申上げましたら、お顔にお優しい御笑を浮べさせ給ひつゝ、

『このあひだ孵つたばかりの傳書鳩の子が、こんな晩はさぞ寒いであらうと思ひ、今懷爐を入れてやつたのです。』

との仰せでございました。そのあまりにもお優しき御溫情の有難さに、後閑女史はたゞ／＼感泣するばかりであつたと承つてをります。

大正十二年の關東大震災の折には、赤倉に御避暑中でありましたが、御手づから數多の衣類をお縫ひ遊ばし、それを慰問品として多くの者に賜りました。當時の御歌に、

あたゝかにふするもくるしふすまなき
假屋に住める人を思へば

と申す御一首があります。民を思はせ給ふ御慈愛の程沁々と仰がれ、畏き極みでございます。

かゝる御慈愛深き、御坤德彌高き國母陛下を戴く、われら民草の光榮は、譬ふるに物なく、只管『御民われ生けるしるしあり』の光榮に感佩し奉る次第でございます。

＊　＊　＊

皇太后陛下の御事

皇太后陛下には、大正天皇崩御の後は、青山の大宮御所にお移り遊ばされ、ひたすら皇國の安泰を神祖に祈らせ給ふ御餘暇には御書見、御作歌等に御虔やかな月日をお過しになつていらせられますが、殊に先帝を御追慕深く、毎朝必ず御陵に向はせられ、御遙拜遊ばされる由洩れ承ります。

最近、皇太子殿下御降誕に當り皇太后陛下には殊の外御喜び遊ばされ、時恰も宮中喪にあたつてをられましたが本年に入り宮中喪の期間滿了せらるゝと共に、多摩御陵へ御報告參拜を仰せ出されました。思召を拜して係官は直に準備を整へましたが、陛下の御休憩遊ばされる便殿の裝飾に付ては、別段の御取設を致さない事に致しました。

愈々御參拜の當日、皇太后陛下には多摩御陵に行啓になり、便殿に入御あつて御休憩遊ばしながら、ふと御目を隅なる机上に注がせ給ふと、小さき花生の中にほんの僅かながら、つつましやかに數本の花が挿してございました。

陛下には、御少憩の後、御陵に御參拜、御叮嚀な御禮拜を終らせられ、やがて還啓遊ばされる時刻が參りました。すると突然、陛下に扈從申上げてゐた供奉員の一人が、山陵守護の係官の許に參り、畏くも陛下より、

『あの便殿に挿してある花を持歸つてもよいか。』

との意外な御沙汰を賜つたのでございます。前以て準備の際便殿には何も裝飾をしないで宜しいとの供奉員の内話ではありましたが、それでは餘りに恐れ多いとて、山陵守護の任に在る一陵墓守部の妻女が、せめて心ばかりのお部屋飾りをと、僅かばかりのお花を丹精籠めてお飾りしておきました。それに御目を留めさせられて、斯くは仰出されたものでございました。何分にも僅かなる挿花のこととて、あまりの意外に感じた係官は、

『あれはほんのお間に合せのもので、お持ちかへりをお願ひ申上げるには、餘りに恐れ多うございます。』

と拜辭申上げますと、皇太后陛下には重ねて御懇望遊ばされましたので、御下命に恐懼しながら、そのお花を差上げた由に承ります。甚だ恐れ多い事でございますが、陛下が特にこのやうな御下命を賜りましたことは、その花の美しさよりも、せめてのお飾りにもとお挿し申上げた者の眞心をお汲取り遊ばされた事かと拜察されて、有難き思召に一同ひたすら感激いたしたと申すことでございます。

照宮成子内親王殿下の御事

照宮様は、女子學習院前期三年生にならせられました。宮様はいつもにこ〳〵としてゐられ、御級友一同から『宮様、宮様』と仰がれておいでになると承ります。

初めて御入學の頃はあまりに、『宮様、宮様』と衆目の的とならせられました爲、いさゝかお羞かみの御様子に拜せられたと承りますが、次第にお慣れ遊ばして、只今では、いつも御元氣に、御級友間の敬愛の御中心になつていらせられる由に承ります。

御通學の御服装は全部普通の生徒達と同じく、水兵型のお洋服をお召しになつてをられます。學用品は學校の購買部でおもとめになり、すべて普通の生徒と少しもお變りはありません。たゞ『宮様』とお呼び申上げるのが違ふだけであると承つてをります。

高貴の御方のこととて、自然御氣品のお高いうちにも、誠におやさしくいらせられ、お遊びの時間などに御廊下で先生方にお會ひになつた時などは、いつも宮様の方から御叮嚀に禮をなさいますので恐れ入るとの事でございます。

お成績は大變およろしく、よく御同級の兒童達

が歸宅して宮様の御事をお噂さ申上げる場合など『宮様はとてもよくお出來になつて、いつも四重丸をお貰ひになつてお偉いのよ。』と御敬服申上げてゐるといふに見ても、ほゞ御想像申上げることが出來ます。數學、讀方のよくお出來遊ばすのは申すまでもなく、殊に圖畫と唱歌とが、大變お上手でいらせられると承ります。學校では、年に一度づつ修辭會といふ學藝會が催されますが、宮様は昨年この修辭會に、七八人の御級友と御一緒に唱歌の合唱におでましになりましたが、そのお聲は、とりわけお高くお美しく感じられたと承ります。

女子學習院には獨特の『巴合戰』といふ競爭遊戲があります。これは全級が三組に別れ、各組別に赤、白、黄と色の違ふ襷をかけて、自陣の眞中に立てた旗を守り、赤襷は白襷に、白襷は黄襷に、黄襷は赤襷に、それ〴〵背中を叩かれると負けとなつて、競技から退く規則になつてをります。かうして互に三組の者が背中を叩き叩かれてゐる中に、勇敢に敵陣に飛込んで相手の陣地に立ててある旗に手をふれて動かせば、それで勝となるといふ大層面白い遊戲でございますが、照宮様はとりわけこの遊戲がお好きで、いつも御活潑に御運動遊ばすとの事でございます。

お辨當は、アルマイト（銹止めをしたアルミニユーム）製のお辨當箱に詰めてお持ちになりますが、とりわけお壽司をお好み遊ばすやうで、よくお持ちになるさうでございます。

學習院では、教科書の中に生徒のわかりにくい言葉などが出るやうな事がありますと、時折實地の御見學を行はれます。昨秋も、宮様は同級生と御一緒に御徒歩で、青山郵便局や青山市場などを御見學遊ばされました。郵便局では目の廻るやうな事務振りを御覽あらせられ、市場では、人參、大根、白菜などの青物の山の間を縫つて、燒竹輪、豆腐、章魚、干瓢など、いろ〳〵の日用品や食料品などを、御興味深く御見學遊ばされた由に承ります。

照宮様の御殿呉竹寮には、只今は御附の大人ばかりの間に宮様お一方でおいで遊ばしますが、しば〳〵御妹宮様方がおいでになつて、お賑やかにお遊び遊ばしたり、又、一週に二度、同級の方方が放課後、交代に四名づつ參殿して、御復習やお遊びのお相手を申上げるとの事でございます。

宮様は、決して誰がお好き、誰がお嫌ひといふやうなわけへだてを遊ばすやうな事はなく、全御學友と御仲睦しくいらせられますことは、まことに恐れ多いほどであると承ります。

呉竹寮の御庭にはお滑り臺などもあり、宮様はお元氣に御學友とお遊びになります。御復習の時は、先生の差上げた新題をお解きになり、お點をつけてお貰ひになりますが、御才能豐かにましまし、御進歩が寔にお早いと洩れ承ります。

秩父宮同妃兩殿下の御事

秩父宮殿下が各種の體育競技に深い御理解を持たせ給ふ事は、世間であまねく存じ上げてゐる通りでございますが、殿下には又御學問の上にも大變御熱心御精勵でいらせられる由承ります。

陸軍大學校御在學中の如きは、普通の學生ですら學科の勉強に全力をあげてさへ其の日も足らぬ程であるのに、殿下には、御直宮として公私共多方面にわたる重要なお仕事を數多く持たせられるため、やゝともすれば御勉學のお時間が御不足勝ちになられますので、夜半二時、三時頃までも御卓に向はせられる事が珍らしくなかつたと洩れ承ります。平生御自身のお仕事は他人にはお任せにならず全部御自身に遊ばす爲、或時には殆んどお徹夜遊ばした事などもあり、その御精勵は到底普通の者の企て及ぶべくもない程であると承つてをります。

妃殿下には、殿下が御書齋にお入り遊ばすと、御自身のお居間にてお讀書やお手すさびなど遊ばしながら、御用があればお伺ひになられ、殿下のお疲れをお慰め申上げられる爲、御手づからお茶などお入れ遊ばす由でございます。その御貞淑の御徳は伺ふだに感激の至りでございます。

昭和六年の夏、秩父宮殿下には陸軍大學校の學生の御資格で京都府下に行はれた夏季演習の御見

學に成らせられたことがございました。この時、妃殿下にも亦御西下あらせられ、美術及び歴史の實地御學修の爲に、大和山城の各地を御見學なさつたのでございます。

旣に法隆寺や奈良などをお巡りあそばされた妃殿下には八月三日の眞晝時、暑さのお厭ひもなく、宇治の平等院に成らせられました。そして、あの美しい鳳凰堂を飽かず御鑑賞あらせられ、境内に溢るゝばかりの奉迎者に懇ろなる御會釋を賜ひながら、池のほとりより宇治川の堤の上にお登り遊ばされ、葉櫻香る並木道をおひろひになつてをられました。折柄遙か彼方、宇治川の中洲には一隊の兵士達が、熱心に架橋演習に從事してゐる有様が小さく見えてをります。

その時お待ち受け申上げてゐた陸軍少佐の軍服を着けた武官が恭しくお側近く進み出で、妃殿下に敬禮を捧げて、

『謹んで言上致します。殿下には連日の酷暑にもかゝはらせられず、御健勝にわたらせられ、只今あちらの中洲におかせられて工兵隊の架橋工事の演習を御見學中であらせられます。恐れながらあの天幕の前にお立ちになつていらせられますのが殿下であります。』

と御報告申上げました。すると、妃殿下には、そちらの方に虔しく御身を向けさせられ、遙か彼方におはします殿下の御姿をぢつと御見守りあそばされ、無言の御目禮をあそばされました。その一瞬間、貴き御態度に打たれて、側近の者は何とも譬へやうなき神々しさに、覺えず首を垂れて感激に打たれたと承ります。殿下には、金枝玉葉の御身を以て、炎天烈日を冒して軍務に御精勵あらせられ、兵卒と辛苦を分たせたまひて、少しの御休息も遊ばされず、數日の間、妃殿下とも御對面の折さへあらせられなかつたのでございます。圖らずも、御恙なき背宮殿下の御姿を遙にみそなはしたまへる妃殿下の御目禮の中にはその御勞苦に對したてまつり、千萬無量の御感慨のこめられたまへることと、恐れながら拜察されたのでございます。

殿下はまた剛毅濶達にわたらせられ、御日常大層御質素にいらせられると承ります。昭和三年秋、新御殿が竣工して始めて殿下の御檢閲を仰いだ時、殿下の御居間となるべきお部屋に暖房裝置のスチームが設備してあるのを御覽になり、

『これはスチームではないか。畏くも明治天皇は日露戰役當時、お齢を召していらせられたのにも拘らず、御手あぶりすらお用ひにならなかつたと聞いてゐる。われ〳〵若いものが、スチームで暖をとるなどとは以ての外である。これは直ぐ取除けておくやうに。』

と仰せられましたので、係官は思召の程を承り、恐懼措くところを知らなかつたと申すことでございます。そのスチームは直に取除かれ、爾來殿下の御居間には如何なる嚴冬と雖も小さな御手あぶり一つの外は決してお用ひなき由洩れ承つてをります。

高松宮同妃兩殿下の御事

昭和五年の春、芽出度く御婚儀を擧げさせられた高松宮殿下には、同年四月、天皇陛下の御特使として、妃殿下とお揃ひで、遙々英國皇帝を御訪問遊ばされました。

湧き立つ歡呼の裡に、英京倫敦に御到着遊ばされ、いよ〳〵英國皇帝に御謁見の前日のこと、英國宮廷から御使者が來られて、

『明日は宮中からお迎への御馬車を差上げることになつてをりますが、お召し遊ばされる時には、英國皇室の儀禮にお從ひ下さいまして、殿下が御馬車の左側に、妃殿下が右側にお召し遊ばされますやうに。』

と言上されたのであります。すると、これをお聞き遊ばされた殿下には、言下に、

『予は苟くも天皇陛下の御名代として英國皇帝陛下にお目にかかるのである。貴國には貴國の儀禮があるやうに、わが日本にも日本皇室としての儀禮がある。予が天皇陛下の御名代として御訪問申上げる場合は、日本皇室の儀禮に從ふのが當然であつて、これを予が勝手に左右する譯には行かぬ

であらう。』

と、きつぱりとお斷り遊ばされました。御年二十六の御若さにも拘らず、この堂々たる御見識をお示し遊ばされたことを、誰しも恐懼し感佩せぬ者とてはなかつたと申すことでございます。

ところが數日後、倫敦市長が兩殿下を御招待申上げる事になりましたが、側近の人々は此度も前同樣、日本皇室の儀禮に依つて台臨遊ばすものと拜察申上げて居りますと、案に相違して今度は英國風の儀禮に依り、妃殿下を右側に遊ばしてお乘物にお召しになつたのであります。不審に存じ上げた隨行の一員が、恐る〳〵お伺ひ申上げると、殿下はにつこりと微笑まれ、

『此度の市長の招宴は、陛下の御名代としてではなく、日本皇族の一人としての予の旅情を慰めてくれる爲であるから、英國風の儀禮に從ふのが當然ではないか。』

と仰せられた由でございます。殿下のこの御思慮深き御態度には、ひとり在留同胞のみならず、英國人も擧つて御敬服申上げたと承ります。

妃殿下の御氣高くお優しくいらせられる事も畏い極でございます。御渡歐の際にも御便乘の鹿島丸の船客などの中には『あのお優しい妃殿下には船にお弱くあらせられはせぬか。』と密かに御心配申上げてゐた者もございましたが、やがて船が印度洋を通過する頃、嘗てない大荒れに襲はれ、流石の巨船も木の葉の如く搖れ始め、多くの船客達はいづれも船室に閉ぢ籠り、殆ど姿を見せる者とてはない有樣でありましたが、此時意外にも、妃殿下にはこの大荒れをものとも遊ばされず、悠々と甲板におでましになり、四圍に物凄く荒れ狂ふ高波を御覽遊ばしてをられました。そのお姿を拜した船員達も、流石は海の宮様の御妃と驚嘆し奉つたと申すことでございます。

高松宮殿下には、又よく、下々の生活にもお通じ遊ばされていらせられます。昭和二年名古屋大演習の砌、御假泊所にお着き遊ばした殿下には、同所の人々に拜謁仰付けられた後、

『予の部屋を一寸見せて貰ひたい。』

と仰せ出されました。主人は恐懼しながら、御設備萬端の用意整つた殿下のお部屋へ御案内申上げますと、殿下には再び主人に、

『他の部屋をついでに見せて貰ひたい。』

と仰せられました。主人はいよ〳〵恐懼して、二階の六疊と五疊二間續きの手狹な室を御覽に入れますと、

『先刻の予の部屋は──あまり設備が良過ぎて今度は困る。こちらの部屋でよいからこちらにしたい。』

と仰せられて、遂に八日間を、この狹い六疊と五疊のお部屋に御假泊遊ばされたのであります。殿下のかゝる深き思召しは、畏くも皇太后陛下の御心を體し給へるもので、

『東京ではさういふ經驗をなさる機會はないが、大演習の際などは、誠によい機會であるから、なるべく下々の家庭の様子がよく分るやう、十分その生活を研究するやうに。』

と、日頃から御教訓あらせられた由でありますが、洩れ承るだに恐懼の極みでございます。

澄宮崇仁親王殿下の御事

この春三月、陸軍士官學校豫科を御卒業の澄宮殿下には、次いで習志野騎兵第十五聯隊に御入隊遊ばされました。同隊では、一上等兵の御資格で御勤務になり、御食事もすべて普通兵士と同樣、四分六分の麥飯を召上つてをられます。從來、士官學校では、御直宮樣に限り、特に司厨部を置き、特別に御調理申上げてをつたのでありますが、今後は『特別の扱ひは困る』と仰出され、全く一般兵士と何等お變りない御生活を遊ばされることになりました由、洵に感激の極みでございます。

先に殿下が士官學校に御入學遊ばされて間もない頃のこと、國語科擔任の友田宜剛教授が教室で『新生活に入りて』といふお作文の題を差上げたところ、殿下には直ちに美濃紙二枚にお書きになつて、御提出遊ばされました。そのお作文の御内容を拜見いたしますと、先づ士官學校に御入學のお喜びを述べさせられた後に、

『學習院初等科に入學した時は、片假名、平假名

さへも知らなかつたが、かうして今日あるに至つたのは、實に十年一日の如く敎育指導して下さつたわが諸先生の賜物である。』と申す意味の御文詞で結ばせられてありましたので、友田敎授は大いに感激し、このお作文を豫科新入生三百數十名に對し、模範文として謹讀拜聽させたと承つてをります。

殿下には、御幼少の折には『童謠の宮樣』と讃へられ給うたほどの、お豐かなる文學上の御天分に富ませられますが、今日では御日常が大層お忙しくいらせられ、到底お歌をおよみ遊ばすお暇もあらせられぬ程であると承つてをります。

夏冬によつて多少お時間に相違はありますが、士官學校ならびに軍隊に於ける御生活を伺ひますと、朝は大抵五時半には御起床遊ばされ、夜は九時乃至九時半の消燈でありますから、御生活がすべて御規律正しくいらせられます。畏き事ながら、御性格は至つて公正にあらせられ、御同情心に富ませ給ひ、御理解も深く、すべて物事に御熱心で、從つて御成績も非常に御優秀で、御學科は何を遊ばしても平均に洵によくお出來遊ばし敎官一同も驚嘆申上げてゐるとの事でございます。

昭和七年三月、殿下がまだ學習院御在學中のこと、お召自動車の運轉手が、運轉の途中、腦溢血の爲に卒倒しましたのを、殿下には痛く御心にかけさせられて、御用掛を御見舞に差遣はされましたが、看護の甲斐もなく遂に死去した旨をお聞きになりますと、特に祭粢料までも賜りました。一運轉手に對して、この破格の厚き御沙汰を拜した遺族一同の者は、恐懼措くところを知らず、御仁情に感泣いたしたとの事でございます。

閑院宮各殿下の御事

非常時日本陸軍の參謀總長として、貴き御身を以て日夜國軍の爲に御盡瘁遊ばさるゝ元帥閑院宮載仁親王殿下には、本年御めでたく古稀の御壽を迎へさせられました。殿下の御英邁にましまし、畏くも日清日露の兩役に赫々たる御武勳をお樹て遊ばされた事どもは、われら國民の肝に銘じて感佩し奉るところでございます。若宮春仁王殿下も亦御父宮殿下の御資性を受け繼がせ給ひ、御仁慈深く、いと御英邁にわたらせ給ふことは畏き限りでございます。

春仁王殿下には、現に習志野騎兵第十六聯隊第四中隊長として御勤務遊ばされますが、昨年八月、千葉縣松戸町を中心として行はれた江戸川渡河演習御終了後、部隊を御引率、をりから夜半の驟雨を衝いて、乘馬行軍を以て御歸隊遊ばすことになりました。午前二時三十分頃、部隊が同縣市川町に差しかゝり、あたかも國道を横斷しつゝあつた折、突如野菜を滿載した一臺の貨物自動車が、猛烈な速度で疾走し來り、殿下の御馬前とも知らず、行進中の部隊の眞唯中に飛込んだのであります。

御馬術に優れさせ給ふ殿下には、咄嗟に御身を轉じ給ひ、危くも御事無きを得られましたが、殿下の御前を進んでゐた上等兵の乘馬は、前脚を激突して重傷を受けました。その時、殿下には直ちに御下馬あらせられ、種々應急手當のお指圖を遊ばされたのでございますが、何分にも負傷馬は牽馬でなくては行進がかなはぬ狀態であるのを御覽遊ばすや、殿下には、

『負傷馬だけを後に殘すに忍びない。』

と仰せあり、當時連日連夜の演習の爲軍馬の疲勞も甚しく見えましたので中隊全員に下馬を命じ給ひ、全隊牽馬となつて、原隊まで五里の道を徹夜徒歩行軍をお命じ遊ばされたのでございます。さうして、殿下には始終先頭にお立ちになつて行軍を續けられ、無事御歸隊遊ばされたのは、翌朝六時でございました。

この由報告に接した聯隊長以下各將士は、殿下のお慈しみ深き御精神に、甚く感激し奉つたと承つてをります。

＊　＊　＊

東伏見宮周子殿下の御事

東伏見宮故依仁親王妃周子殿下には、特に社會事業方面に深き御心をお用ひ遊ばされる由に承ります。妃殿下には現に愛國婦人會總裁であらせられますが、妃殿下の同會に對するお心盡しのほどは仰ぐも畏き極みでございまして、『奥村(五百子)は草鞋ばきで國中を遊説したさうであるが、皇族の身としてそれは出來ないけれども、草鞋ばきの心持で何なりと會の爲に働くであらうから……』

と仰せられたほどの御熱心さで、會の爲ならば御都合のおつきになる限り、何くれとお盡し遊ばされ、御身體に御無理はあらせられぬかと、御側近の方々もお案じ申すことがしば〳〵であると、承るだに恐懼の極みでございます。

昨年の暮には、震災記念堂に親しく御參拜あらせられ、その御歸途、同愛病院にお成り遊ばされました。この同愛病院は、施療患者が大多數でございますが、妃殿下には特に院長に御案内を仰付けられ、病院内をほとんど殘る隈なく親しく御巡覽遊ばされた御仁慈の深さ、御思召の有難さに一同感泣いたしたと承ります。

故背宮殿下の御祭は、極めて御鄭重に行ばせられ、毎月の御命日には必ず豐島ケ岡へ御墓參遊ばされます。御墓前に供へられるお花は、お手づから御栽培になられたものを御持參遊ばし、お花とお水とをお供へ遊ばして後、さながら背宮殿下に御對面遊ばすかのやうに、いとも御鄭重に御禮拜遊ばす畏さに、御側近の方々いづれも涙新たに、感動し奉る由に承ります。

東伏見邦英伯爵(久邇宮から出られて東伏見宮の御祭祀を司らせ給ひ、臣籍に入らせられました)に對せられる御いつくしみの程も一際お深くあらせられる由承るのも、御ゆかしき限りに存じ奉ります。

伏見宮各殿下の御事

元帥伏見宮博恭王殿下には、軍令部總長として非常時日本の海軍軍令部を御統轄遊ばされ、日夜軍務に御精勵あらせられます。

殿下の御日常は、非常に御規律正しくいらせられ、毎日午前六時御起床、九時には必ず軍令部にお出ましになります。御歸還は午後四時。お晝は海軍省食堂にて、他の將官と御同樣にお一皿盛の簡單なランチをお召上り遊ばされるとの事でございます。殿下には、夙く海軍にお入り遊ばして以來、中將に御陞進遊ばすまで、長く海上に御勤務あらせられたため、お食事など常に御簡素にあらせられる由、承るだに感激の至りでございます。

妃殿下には、お日頃はお可愛い博明王殿下、光子女王殿下、令子女王殿下、章子女王殿下など御孫宮樣方の御敎育に御專心遊ばし、各殿下も『おばば樣』と此上なくお慕ひ遊ばされ、御なごやかな日をお過し遊ばされる由承ります。

尙、妃殿下には、寄邊ない孤兒達を世話してゐる福田會の總裁を遊ばし、不幸な子女達の幸福の爲に、何くれとなくお指圖あらせられますことは、洵に有難い極みでございます。

若宮博義王殿下には海軍中佐におはしまし、昨年秋まで驅逐艦『天霧』の艦長でいらせられましたが、只今は海軍大學校選科學生として水雷の御研究にいそしんでいらせられます。

若宮妃朝子殿下には、王子樣方御愛育の御傍ら御家事向萬事に御心を注がせられ、殊に、王女樣方お召しのお洋服なども御手づから御工夫遊ばすやう洩れ承ります。

＊　＊　＊

山階宮武彦王殿下の御事

山階宮武彦王殿下には、大正七年海軍兵學校を御卒業後、追濱海軍航空隊に御入隊遊ばされ、飛行術の御練習を遊ばされました。皇族の貴き御身を以て飛行隊にお入り遊ばされたことは、實に空前の御事にて、大正十年七月六日、御愛用の横廠式二百馬力イの七八號機を御操縦遊ばされ、十二米の南風を衝いて、東京市の上空を御快翔になつた際のお見事なる御操縦ぶりと、烈風を物ともなし給はぬ御勇氣の程には、隊員一同感奮して、その御英姿を仰ぎ奉つたと承ります。

尚、殿下には、教育の方面にも非常にお深い御心と御理解とを備へさせられ、去る大正十一年秋、某高等女學校の生徒作品展覽會にお成り遊ばされた砌には、特に校主に習字擔任の教師は誰かとお聞き遊ばされて、『此校の習字は精神が籠つてゐてよいと思ふ、習字で精神修養をすることは、誠に適切重要なことであるから、今後も一層の努力を望む。』との御懇篤なる御激勵のお言葉を賜はり、教職員は勿論、生徒一同感激いたしたと申します。

又、關東大震災の際には、鎌倉御別邸倒壞の爲に、妃殿下を喪はせ給うたほどの御不幸をも忍ばせ給うて、大震火災の爲に全燒した某高等女學校の生徒三百餘名が、歸るに家なく右往左往してゐるのに御同情遊ばされ、畏くも山階宮御邸內へ避難することをお許しあり、御庭園に飛行機用天幕を張らせ、炊出しを命じ給ひ、つゞいて飛行機格納庫を御下賜になり、燒跡に復舊を急がせ給ふなど、その御仁慈深き御心の有難さに一同恐懼、感激の涙に咽んだと申します。

賀陽宮各殿下の御事

賀陽宮恒憲王、同妃敏子兩殿下には、今春三月お揃ひにて御渡歐の旅に御出發遊ばされました。殿下には、御日頃より海外移民に御心を用ひさせられ、今回の御旅行に當つては、特に英佛の御日程をお差繰りに相成り、南米ブラジル、ウルガイ、アルゼンチン、チリー及びペルーをも御巡訪遊ばされ、親しくわが移民狀況を御視察あらせらるゝ由に承ります。

わが皇族方が、南米方面を御視察遊ばすのは最初の御事とて、同地在住の同胞達は、この光榮に浴する日を、一日千秋の思ひにてお待ち申上げてをるとの事でございます。

陸軍騎兵少佐にまします殿下が、御馬術に御堪能でいらせられることは、申上げるまでもない事でありますが、曾て名古屋騎兵第三聯隊に御在勤の當時、兵士達と共に木曾川の水馬を遊ばした事がございます。日本三急流の一と稱せられる木曾川は、表面の流は緩くとも、下層は殊の外水勢速く、これを泳ぎ渡ることは容易ならぬ事でありますが、殿下にはこれを堂々と橫斷遊ばされました。そのお手際の鮮かさに、隊の者一同感嘆措く所を知らなかつたと申します。

殿下は又御記憶力に勝れさせ給ひ、かつて騎兵第三聯隊におはせし頃、殿下には第一中隊長として僅々一週間のうちに部下數十名の初年兵の姓名は勿論、各自の家庭の狀況まで委しく御記憶遊ばされ、兵士達一同を恐懼感嘆せしめ給うたと申すことでございます。

高貴の御身にも拘はらせられず、その御質素な御日常は、承るだに畏き極みでございます。現在お住ひの宮邸は、宮內省の官舍で、曾ては宮內官が拜借申し上げた事もあり、建造も古く、お手狹でございますが、それにも構はせられず、御不自由をお忍び遊ばしてをらるゝ由に洩れ承ります。

大妃好子殿下には、恒憲王殿下を初め姬宮樣方を、すべて御自身の御手にてお育て遊ばされましたので、恒憲王妃敏子殿下におかせられましても、すべて大妃殿下にならはせ給うて、若宮樣方の御授乳から御教育まで、一切を御自身で遊ばされる由承ります。

久邇宮各殿下の御事

畏くも皇后陛下の御生母宮にわたらせ給ふ久邇宮大妃俔子殿下には、朝は必らず七時御起床、それより夜の十時迄、何くれとなく御家事に御精勵あらせられます。お附の人々が御身體にお障りあらせられてはと、御心配申上げるやうなことがございましても、お取上げになる御樣子さへあらせられぬのは、一同恐懼するばかりであると洩れ承ります。

海軍少佐朝融王殿下には、巡洋艦『木曾』の砲術長として御勤務遊ばされますが、砲術にかけては橫須賀鎭守府屈指の名手でいらせられます。御勤務の餘暇を御利用になり、蜜蜂の飼育や軍用犬の訓練などに深い御趣味をお持ち遊ばされ、昨年上野に催された軍用犬展覽會には、愛犬を御出展遊ばし、見事一等賞を御獲得遊ばされました。

妃殿下には、邦昭王殿下をはじめ御四方の御母君であらせられ、お小さい若宮、姬宮殿下の御敎育について、いろ／＼御心をお用ひ遊ばす由に承ります。

姬宮殿下の御平常召されてゐる毛糸の御服は、御母宮殿下が御手づからお編み遊ばされたものと拜聞致しました御學友の母姉を初め諸先生方まで、雲上の貴き御身を以て、姬宮殿下のお召物までお編み遊ばす畏さよと、今更の如く感激いたしたさうでございます。

御當主宮朝融王殿下の御叔父宮にわたらせ給ふ多嘉王殿下には、伊勢大神宮の祭主にましまし、御一家は京都にゐられます。曾て拜謁仰付けられた者が、『殿下には殊のほか、御健康にわたらせられますが、何か御日常に特別の御健康法でもあらせられるのでございませうか。』と不躾にも言上いたしますと、殿下には朗らかにお笑ひ遊ばし、『身體には早起きが何よりの藥である。』と仰せられたので、その者は恐懼の極、言葉もなかつたと申します。殿下の御規律正しき御精勵の御日常は、洵に恐れ多い程におはしますと洩れ承ります。

多嘉王殿下の若宮姬宮御三方は、京都におはします關係上、御三方とも普通の學校に御通學あらせられます。妃殿下には御質素御精勵にましますす御背宮殿下の御心を體し給ひ、表立つた交際場裡等にお立ち遊ばすやうのことなく、ひたすら若宮姬宮の御敎養に御盡瘁遊ばされ給ふのは、誠に恐れ多い事でございます。

梨本宮同妃兩殿下の御事

昭和七年秋、梨本宮守正王殿下には、飛行機命名式に台臨の爲め、九州八幡市に御假泊遊ばされたことがございます。その時、五十歲近い植田もいと名乘る一婦人が、『宮樣に拜謁を仰附けられたうございます。』と、願ひ出ました。御附の者がこの婦人の持參した戶籍謄本を殿下の御覽に入れますと、殿下にはハタとお膝をお打ち遊ばし、殊の外お喜びの御氣色にて、直ちに賜謁のお許しが出ました。

今から三十數年前、殿下がまだ廣島第五師團に御在勤中、一日、御乘馬が列車の音に驚いて線路內に躍り込み、殿下には列車通過の寸前にて線路外にお飛降り遊ばされて、御無事であらせられましたが、御乘馬は無殘にも轢死を遂げたといふ恐れ多い出來事がございました。

この時、その場に居合せ、高貴の御方とは露知らず、咄嗟に馳せつけて、殿下の御身體を抱き參らせ、御介抱申上げた中村まさ子さんといふ婦人

があります。殿下にはこのまさ子さんの御介抱を深く御心に留めさせられ、その後、破格の思召を以て宮家お出入を差許されました。植田もとさんは、このまさ子さんの娘で、老齢の母の代理として御機嫌奉伺に參上したものである事が分り、この由を拜承した者は、いつもながら殿下の御仁慈の厚きに更に感泣いたしたのでございます。妃殿下にも宮殿下御同樣、極めて御慈愛深くわたらせられます。

一昨年の春、妃殿下が大磯の御別邸に御避寒中、一臺の戰鬪機が發動機の故障のため、同海岸に墜落した事がありました。その樣子を御覽遊ばされた妃殿下には、宮殿下御共々、直ちに現場へお成り遊ばされ、附近の者をお指圖遊ばしながら御用意のガーゼ、藥品等にて、いと懇ろに負傷した搭乘者のお手當を遊ばされました。負傷者は勿論、附近の民草一同、あまりの恐れ多さ、有難さに感泣せぬ者とてはなかつたと承ります。

朝香宮各殿下の御事

朝香宮鳩彦王殿下、ならびに昨年秋薨去あらせられた妃允子内親王殿下には、御二方とも非常に繪畫に對する御嗜み深くいらせられ、昨秋の日本美術院展覽會にも、兩殿下御同列にてお成り遊ばされました。京都の富田溪仙氏筆の屏風『御室の櫻』は、非常な傑作として當時絶讃を博したものでありますが、妃殿下にはこの繪にいたく御感嘆遊ばされ、永くその前に御歩みを停めさせられたのでございます。

それより間もなく、妃殿下にはかりそめの御病に臥させ給うたのでございますが、鳩彦王殿下には妃宮樣のお惱を慰めたまふ御心より『御室の櫻』の屏風を御所望あらせられる旨仰出されましたので、富田畫伯は光榮に感激して、院展名古屋陳列場より急ぎお納め申上げたのでありましたが、悲しくもそれは、すでに神去りまし、妃殿下の御靈を慰め奉ることとなりました。

背宮殿下を初め奉り、若宮姫宮殿下の御悲嘆は、拜察申上ぐるだに恐れ多い極みでございます。

殊に、殿下は申すに及ばず若宮姫宮殿下には百日祭の終らせ給ひし二月十日まで、一日として御怠りあらせられず、目黒の宮邸より豐島ケ岡の御墓へと、遠路おいとひもなく、日毎御參拜遊ばされました。若宮姫宮殿下の御孝心のほど感激の外ございません。

東久邇宮同妃兩殿下の御事

東久邇宮稔彦王殿下には、常に國民の上に厚き御慈しみを垂れさせ給ひ、殊に勞働階級の健康狀態、生活狀態、勞働狀態等を絶えず御調査遊ばされ、その指導向上に御心を用ひさせ給ふなど、承はるだに有難き極みでございます。

第二師團長として仙臺にいらせられる殿下には、昨年の暮、福島縣下の產業狀況を御視察の砌、磐城炭坑に成らせられ、坑内深く懸命の作業に從事する炭坑夫の勞苦を犒はせ給ふ思召しを以て、金枝玉葉の御身をもいとはせられず、地下七百尺の坑道内に降り立たせ給ひ、地溫八十度を超え、惡氣流の漂ふ坑内にて、危險なる爆破作業及び採炭狀況等を備さに御視察遊ばされ、坑夫達に親しく御慰勞のお言葉まで賜りました。その御仁慈の廣大さに、坑夫一同、涙を浮べ地にひれ伏して、感激いたした由に承ります。

妃殿下には、畏くも明治天皇の第九皇女にましまし、わけて敷島の道に御堪能であらせられ、御詞藻豐かな御歌を數多お詠み遊ばしていらせられます。

曾て關東大震災の當時、麻布の宮邸の御門前近く、百餘名の迷兒が收容されてをりましたが、妃殿下にはその幼兒達を可憐に思召して、毎日のやうに、お見舞ひ遊ばされ、見事な御菓子など賜はつたと承ります。その時の御實感を、

子をもちていまこそ深く知られけれ
　われはぐくみし人のなさけは

と、お詠み遊ばしました。この有難き御歌を拜して、妃殿下の深き御慈愛のほどを、皆感泣し奉つたと申すことでございます。

北白川宮房子内親王殿下の御事

滿洲、上海兩事變の傷病將士が、牛込戸山町の陸軍第一衞戍病院に收容されて間もない頃、各方面から慰問の見舞人が參集してゐた中に、氣高いお姿の貴婦人が、時にはお一人で、時には令孃を伴はれて、度々お見舞に見え、傷病將士を手厚く犒はれるのでありました。

傷病將士達は不審に思ひ、その貴婦人の御身分を調査して見ますと、畏くも、北白川宮房子内親王殿下にましますことが分りました。それと存じ上げて[illegible]、その次にいらせられた時には、病院側でも御休憩所に御案内申上げたき旨を願ひ出でましたところ、

『傷病兵を見舞ひに來たのであるから、決してさういふ心配をせぬやうに。』

とのお言葉で、各係員もその有難き思召を拜し、一同感激に堪へなかつたと承ります。

かつて大正十四年の春東京市主催にて玩具展覽會が銀座松坂屋に開催された事があります。この時、同展覽會の審査長を託されてゐた關寛之氏が、廣く國民家庭教育の資料にと、各宮家御秘藏の御玩具を拜借いたしました。

當時、北白川宮家よりお貸下げの御玩具は、白木の[illegible]が、恐れ多い事ながら、[illegible]しの爲に黒ずみ、[illegible]鑪をかけたやうに擦り減つてをり、爼は全面庖丁の跡で滿されてゐたと承ります。

一般に、幼兒は移り氣で物を壞すものと思ひ込み、色々と新らしい玩具を次から次へと與へることは、大變間違つた考へで、兒童教育の上から言へば、有効な品を長く大切に用ひさせるといふ事が、最も大切であるといはれます。北白川宮家よりお貸下に成つたこの御三品の御玩具を拜見して、審査長關寛之氏は、妃殿下の教育上の御鑑識の、いかに高くあらせられるかを思うて、唯々感激するのみであつたと申します。

竹田宮各殿下の御事

竹田宮昌子内親王殿下には、大正八年、背宮恒久王殿下の御薨去の後は、唯々、若宮恒徳王、姫宮禮子女王兩殿下の御成人をお樂しみとしていらせられた由に拜聞いたしますが、只今では恒徳王殿下には、陸軍士官學校、騎兵學校等を卒へさせられ、陸軍騎兵中尉に御陞進遊ばし、近く妃殿下をお迎へ遊ばすやうに承ります。

又、禮子女王殿下には、今般御芽出度く佐野伯爵家へ御降嫁に相成り、妃殿下には、御丹精の御甲斐あつて、さぞかし御安堵遊ばされた御事と拜察申上ぐるも畏き次第でございます。

妃殿下が今日まで、若宮姫宮兩殿下の御上を御丹精あらせられた御事は、申上ぐるも畏きことながら、毎日のお辨當やお三時のお指圖まで、すべて[illegible]御自身にて遊ばされたやに承ります。

恒徳王殿下が未だ幼年學校に御在學中の御事、妃殿下には何處にて御覽遊ばされたか靴下修繕器をお取寄せに相成り、それをお手づからお操り遊ばして、若宮殿下のお靴下の破れを御修繕あらせられるお姿を拜し、御側近の方は餘りの恐れ多さに唯々感泣するばかりであつたと洩れ承ります。

恒徳王殿下には陸軍騎兵中尉にましまし、世田谷騎兵第一聯隊に御勤務、目下新馬係として、御熱心に調査統計などお作りになつていらせられます。



王公家各殿下の御事

數年前、李王垠殿下を御中心に、殿下の學習院中等科二年御在學當時の同級生達によつて級友會が催されたことがございます。その席上で殿下には、ふと、

『安藤が見えぬが、どうしてゐるか。』

と御下問がございました。級友の一人が、『安藤は家運挽回の爲に目下養鷄業を營んでをります。』とお答へ申上げると、

『それでは、邸に出入りするやうに傳へてくれ給へ。』

と有難きお言葉がありました。その安藤徹雄氏は元紀州藩の家老の家筋で、當時沒落に瀕してゐたのでありますが、殿下の昔を忘れ給はぬ厚き御友情に救はれたのでございます。安藤氏を初め級友一同が、殿下の畏き御美德に感泣してゐると申すのも、さもある事と存じます。

最近の新聞紙上に、苦學しながら東京女子藥學專門學校に通學してゐる權小南といふ一朝鮮女性の記事が出ましたが、李王垠妃方子女王殿下には非常に御同情遊ばされ月々學資としてお手許金を御下賜ある旨仰せ出されました。この有難き恩命に浴した當人は申す迄もなく、教職員生徒一同、妃殿下の御仁慈に感泣したと承ります。御平素より内鮮融和の爲に、種々御心を注がせ給ふ妃殿下の御高德の程は仰ぐも畏き極みでございます。

近衞騎兵聯隊に御勤務の李鍵公殿下には、御幼年の御頃より下々に對して非常に御同情深くいらせられる由に承ります。曾て御附の者に落度があり、その責任感から辭職をお願ひ申出た時、殿下には暫くお考へになつて、

『お前一人ならばやめるのもよからうが、家族のある身でどうするつもりか。考へ直すがよい。』

との御寛大な御仁慈深き仰せを拜し、その者は餘りの有難さに感泣致した由承ります。

李鍝公殿下には、昨年陸軍砲兵少尉に御任官遊ばされ、野砲兵第一聯隊に御勤務あらせられます。殿下の御孝心深くおはしますことは、下々の感激を禁じ得ぬところでありますが、その一例として次のやうな事を承つてをります。

昨年十一月、殿下には栃木縣下に行はれた演習に御參加遊ばされましたが、或日、將校斥候として御勇敢に御活躍遊ばされますうちに、偶〻コンクリートの橋の上に撒水が過ぎてゐた爲、御乘馬の脚が滑つて、殿下には馬と共に御顚倒遊ばされ、御足部に可なりの御負傷を遊ばされました。若しこの由が新聞紙に誇大に掲載されて、京城の御母君のお耳に達する時は非常な御心痛を遊ばすことを思召された殿下には、御心配無きやう御自らペンを取られて御打電遊ばされたと承ります。

そして殿下には、御宿舍で二日間軍醫の手當をお受けになりましたが、地方のこととて御治療に不便がありましたので、師團長や軍醫部長、其他の者から、御歸邸の上十分お手當遊ばすやうにお願ひ申し上げますと、殿下には、

『傷は心配ない、是非このまゝ演習に參加したい。』

と仰せられましたが、一同の者が切に御歸邸をお願ひ申しましたので、已むなく殿下には一旦御歸邸遊ばされ、御治療六日の後、まだ軍醫のお止め申すのをも拒けられて、再び演習地に御勇姿を現はされたのには、師團長以下將士甚く感激して、士氣頓に擧るものがあつたと申します。

殿下の御孝心深く軍務に御熱心であらせらるゝには、御附の者も常に御感服申上げてゐる由に承ります。

婦人倶樂部　第十五卷第五號　別冊
昭和九年四月十一日　印刷納本
昭和九年五月　一日　發行

編輯兼發行人　新井兵吾
印刷人　渡邊一郎
東京市本郷區駒込坂下町四八
發行所　大日本雄辯會講談社
印刷所　中外印刷株式會社
（送料）この別册だけ（第四種）　六錢



(MADE IN JAPAN)

凸版印刷株式會社特許HB製版印刷